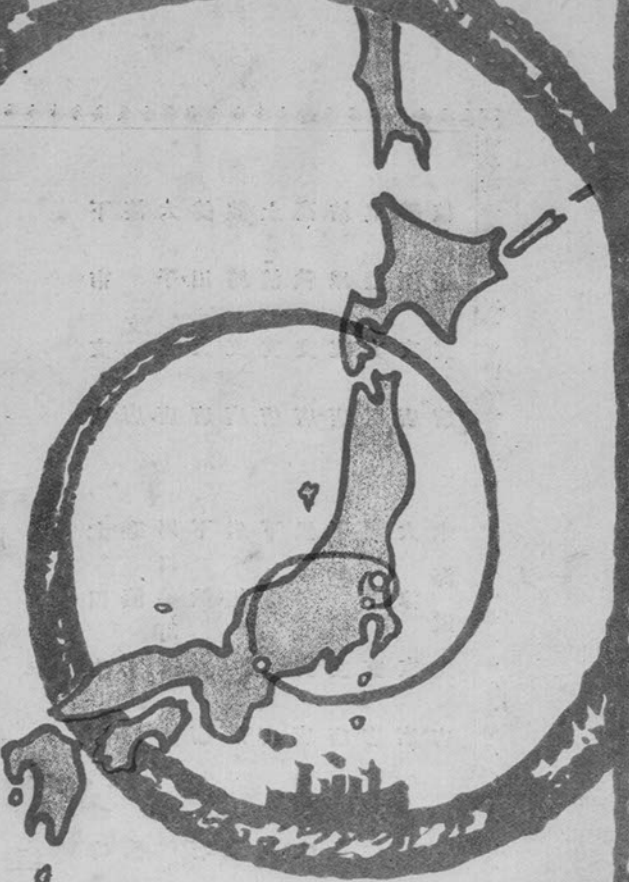
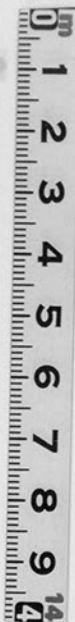


東北公論



第 壹 卷
第 壹 號



水戸市上市南町

株式會社
常磐銀行

電話 七三三番

下	湊	大	銚	龍	土	高	結	眞	礦	植
市	子	田	崎	浦	秋	城	壁	原	田	
支	支	支	支	支	支	支	支	支	支	
店	店	店	店	店	店	店	店	店	店	
太	磯	馬	下	岩	下	黒	下	關	大	水
田	濱	口	館	瀬	妻	子	館	本	津	海
支	支	支	支	支	支	支	支	支	支	道
店	店	店	店	店	店	店	店	店	店	
守	岩	谷	石	三	荒	大	久	佐		
谷	井	原	下	妻	川	町	下	和		
支	支	支	支	支	支	支	支	支		
店	店	店	店	店	店	店	店	店		

東北公論 第一卷

發刊の辭

我邦經濟の近狀、輸入の超過は積年にして、而も重ねて夫の大災禍に遭ふ、國力の損失蓋し尠少なからずとせす、國民何んぞ安逸なるを得ん、況んや歐州の諸國は日に戰傷を醫癒し、米國は固より虎視眈々の狀、或は赤露の事あり、隣邦支那は唯徒に事繁きを見るのみなるに於ておや、國民將に愼み惶るべきの秋ならさらんや、即ち國力の充實は先づ國の富まんを要し、國富の第一歩は、實に産業の自給自足にあり、延いて輸出の促進にあらずんは非るに見て聊が期する所あり、敢て自ら揣らす、邦家經濟の爲めに微力を效さんとするものなり

元より政黨に偏せず全然圈外に超越し、頂天立地不羈獨立の態度を堅守し、堂々たる筆鋒を振ひ侃々諤々不偏不黨の主張を論議し、正義公道の機關たらんとするもなれば、照魔鏡たると同時に師表を以て任し、同志と共に國家の爲め奮闘を試みんことを、是を以て一點の私心なく、名利の爲めに主義主張を枉けず、黨派の爲めに舞文曲筆を弄せず、假借なく正邪判別の法官たらんとするものにして、主義の爲めには總てを捨て邁進するの決心なり、顧念ふに我邦明治維新以來、東北地方に對して行はれし事、西南地方に對して爲されし事の差異あるよりして、萬般の施設懸隔して均衡を得ず、徑庭の存在するを遺憾とし、茲に東北日本振興の第一線に立脚して、我日本の國體と我民族の美俗とを基調として、民力の涵養、文化の促進、思想の善導、自治の發達、産業の獎勵を企畫遂行せんとする爲め、大に言論界に筆陣を張らんとするものは是れ東北公論の使命にして又本領なりとす敢て宜言す

東北公論 第一卷第一號 目次

發刊の辭.....(一)

銀行合議の必要を論して

常總の天地を二分野せんとする

財界の兩雄常磐五十の兩行に及ぶ.....(二)

東北文化協會長.....川崎貞次郎.....(三)

勤儉力行.....(一).....曹洞宗管長.....新井石禪.....(八)

農村問題と國民教育.....(上).....法學博士河田嗣郎.....(二)

水産教育及び水産業の將來.....東京帝國大學助教授.....田中茂穂.....(三)

經濟的經營の根本に就て.....茨城縣立農事試驗場長.....高橋長八.....(六)

所感.....福島縣立相馬農蠶學校長.....佐藤弘毅.....(八)

本邦礦業界の趨勢

常磐に於ける各炭礦.....(一).....荊城生.....(一〇)

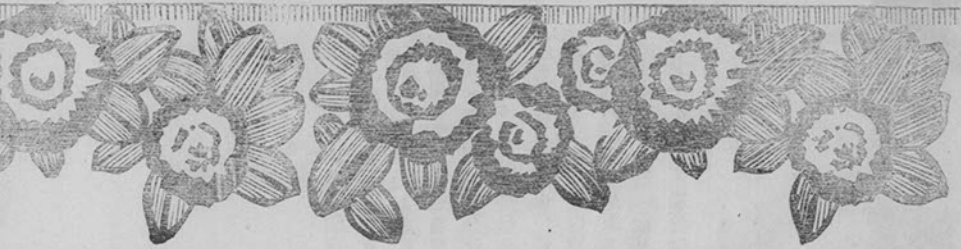
常磐刀圭東介の霸王

常磐病院.....(四)

一寡婦の身を以て女子實科教育に従事する三十有餘年

遂に獨力數萬圓を以て新築せし平陽實科女學校と校長酒井女史.....(七)

磐陽の人陽.....(一〇)



東北公論 第一卷第一號 目次

發刊の辭.....(一)

銀行合議の必要を論して

常總の天地を二分野せんとする

財界の兩雄常磐五十の兩行に及ぶ.....(二)

東北文化協會長.....川崎貞次郎.....(二)

東北公論社長

勤儉力行.....(一).....曹洞宗管長.....新井石禪.....(八)

農村問題と國民教育.....(上).....法學博士河田嗣郎.....(三)

水産教育及び水産業の將來.....東京帝國大學助教授田中茂穂.....(三)

經濟的經營の根本に就て.....茨城縣立農事試驗場長高橋長八.....(六)

所感.....福島縣立相馬農蠶學校長佐藤弘毅.....(八)

本邦礦業界の趨勢

常磐に於ける各炭礦.....(一).....荊城生.....(一〇)

常磐刀圭東介の霸王

常磐病院.....(四)

一寡婦の身を以て女子實科教育に従事する三十有餘年

遂に獨力數萬圓を以て新築せし平陽實科女學校と校長酒井女史.....(一七)

磐陽の人陽.....(一〇)

財界の風雲兒中野甲藏氏.....(三)

實業界の精力家小野晋平氏.....(三)

實業界の德望家馬場房時氏.....(四)

宗教界の奮闘家小松學俊師.....(三)

嗚呼義士松井秀簡.....元和園主人.....(三七)

福島縣釀造業と釀造家.....(四)

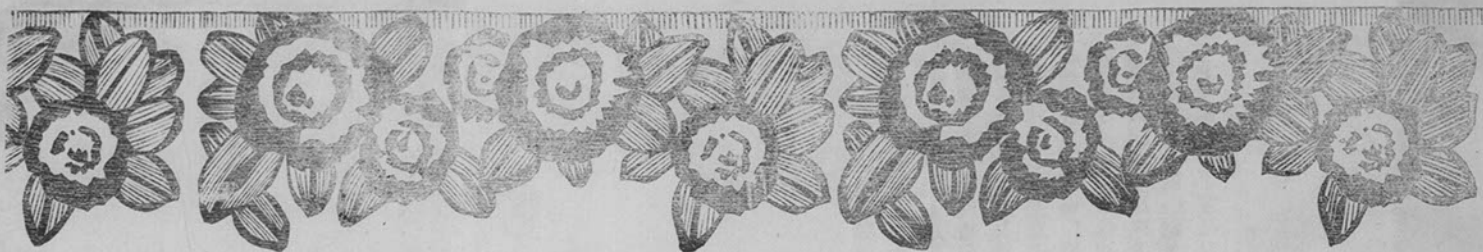
營利事業と社會奉仕との一致併合を

根本精神とせる四倉電氣株式會社.....(四)

公債の民衆化と國民的大節約を

標榜せる斯界の權威日本國債株式會社.....(四)

金成通氏座右銘.....(四七)



銀行合併の必要を論じて

常總の天地を二大分野せんとする

財界の兩雄常磐五十の兩行に及ぶ

(一)



東北文化協會長
東北公論社長

川崎 貞次郎

今や常總の金融界に波瀾を惹起しつつある、銀行合併問題の囂々たるの秋に際し、合併の必要より延いて群小銀行、合併の途上にある常磐、五十の兩行に論及せんとする亦徒爾ならずと信す

世界大戰勃發以來各國の産業界は、異常の活況を呈し、之に伴ひ銀行業亦大に發展を遂げたりと雖も、戦亂一度收まり、財界の反動期に入りては、戦後に處すべき經濟政策として、各種事業の生産費を節約し、企業組織を大ならしめ、以て克く海外諸國との自由競争に堪へんため、資本の増加又は合同を行ふの必要を生じたるか故に、企業合同は輒近顯著なる世界的現象となりたり、就中銀行合併の問題の如きは歐米先進國に於ては、最早之を高調すべき時期を過ぎたるものゝ如く、殊に英國にありては群小銀行の合併は略其極に達し、近來は倫敦金融市場の一流銀行間の合併を招來するに至り、嘗て百數行に達したる英蘭の株式銀行は最近僅に二十行を數ふるのみとなれり、又米國に於ては、大戰勃發に先ち聯邦準備制度を確實し、中央準備銀行普通準備銀行及び地方銀行間に聯絡をこり、其實際の作用と効果に於ては、銀行合併の結果と異らざるものあり、加奈陀銀行制度の如きも亦英國と同様集中主義を執り今日に於ては僅かに十數行を算するのみ、更に獨

逸に於ても近年銀行の合併運動旺盛にして、漸次伯林に集中せられんとしつつあり、而して我銀行界亦この趨勢に洩れず、蓋し戰亂勃發以來我事業界の大活躍は一般銀行をして從來の如く、單なる商業金融機關たるに止まらしめず併せて巨額の資金を事業に放下せしむるの風習を馴致せしかば、銀行業者も之に順應して將來の事業資金供給を豊富ならしむる必要上、從來執り來りし預金主義に資本主義を加味して資本の増大を圖らんとし、茲に漸く銀行合併の機運を醸成したるに共に、他方政府及銀行當局者亦爾來大に金融機關の改善に留意する所あり、預金利率の協定に依り無益の競争を防止すると共に銀行合併の態度を怠らず、地方官憲亦銳意之を勸誘せしかば、民間銀行も漸く合併の必要を感じたるもの、如くなるも未だ充分の成果を見るに至らず、然るに大戰の後を承けたる我經濟界は戰亂による大打撃に對する自衛の必要を感じたると共に、諸外國との競争激甚を加ふるに至りし結果、事業界に於ては合併の氣運は著しく促進せしめられ、着々之か實現をみつゝあるか如しと雖も、銀行の合併は猶運々として事業界の大勢に順應し難きものあり、斯の如きは即ち一國經濟界の發達に資する所以にあらず、蓋し一國産業の發達は金融機關の完成を要件とするものにして、大規模なる産業組織は一般産業界に於ける、巨額なる資金の需用に應じ得べき充分なる資金を有する巨大なる金融機關の確立せられ、産業と金融との聯絡其宜しきを得るに於て初めて其發達を期待し得べきを以てなり

然れば今日反動期の財界に處すべき方策として、金融機關を改善し、産業の振興に必要な資金の圓滿なる供給を圖るに努むるは緊要の事項にして、之れが目的達成上、銀行合併の實現は眞に刻下の急務なりと云はざるべからず、而かも銀行合併の結果は必然之に隨伴すべき、支店制度の統一により金融の調節上、大に便益を得て自己資金の利用を増大せしめ、都鄙間に存する金利の高低を平準ならしめ得べく、或は取引の擴大より、自然經濟上の不安を豫知し得て、適宜の處置を講じ或る程度までは、之れが發生を防止し、萬一恐慌の襲來することあるも、其傷害を軽減し得べく、或は又資金の吸収運用上無益なる競争を避け、營業上の經費

を節約し得へし、更らには又資本の大なるより、世人の信託を増し他銀行との對抗力も生すべく、大に貸付に伴ふ危険を分散し、延いては収益の確實を期待し得、從つて之れによりて人材に相當の待遇を與へ得るのみならず、自然有爲の人材をも迎ふることを得べく、又取引先に對しても種々なる便宜を與ふることを得へし、斯くて萬事安定の上に經營せられんか、我産業をして愈發達せしめ得べきや必せり、是を以て銀行合併は國民經濟上より見るも、又銀行業者自體よりするも、頗る重要な意義を有するものと云ふべきなり、元より銀行合併には所謂「マニトラスト」發生の虞れ之なしとせざらんも、斯の如きは銀行合併の殆んど完成を見たる英國等に於てこそ、多少考慮の餘地ありとするも、二千有餘の大小銀行を存する我國にありては問題とするに足らず、況んや英國に於てさい未だ其弊害の起れるを聞かざるに於てや或は又銀行合併頻々たる結果は銀行相互間の競争を減し、爲めに商工業者か蝸通を受くべき機會を少なからしむへしといふものあれとも、競争の結果に基く蝸通は徒らに商工業者をして無謀の計を取てせしむるの原子なれば、之を適當なる程度に維持裁定するの必要あるのみならず、一面健全なる取引先に對しては、却つて蝸通を與ふるの資源を豊富ならしむべきものと云ふべし

顧念ふに今後地方銀行が孤立して、營業を維持せんことは頗る困難にして、場合によりては大に他の援助を請はざるべからず都市銀行亦地方銀行と意思を疎通して金融の圓滑を圖る要ありと雖も、地方の商工業は地方的特殊の事情の下に其土地の銀行業者にあらずれば、企及し得ざるものあるを以て、有力なる地方銀行は當該地方の金融機關として充分に存立の意義を有するものといふべし、約言すれば地方銀行の合併は大に之を獎勵すべきも之れか實行の結果地方の金融を梗塞せしめざらんことに留想するを要す、從つて資金を中央都市に集中せしめ地方産業の發展を阻碍する虞れあるか如き合同は之を避くるを可とすべし、上述せる如く、我銀行界も世界的機運に促され近年大に合同を實行し來りしは、寔に慶賀すべきことなりと雖も資本増加の割合に比し、行數の未だ著しく減少せざるは合併の餘地甚だ大なるを示すものにして、歐米諸國に比し頗る

述色あるは洵に遺憾に堪へざる所なり、小銀行は固より大銀行と雖も亦進んで一致協力以て整理合併の實績を挙げ、其大資本と信用とを以て社會の進運を助長せんことを期せざるへからず、我が產業界が戰時中顯著なる發達をなしたるに拘らず、金融機關は今尚ほ其組織不完全にして資力亦貧弱なるを免れず、この弊を救ふの策は唯銀行合併の一あるのみ、銀行業者たるものは須らく國家の利益を主眼とし國民共同の利害を自覺し、以て小銀行分立の弊害を除去するに努めざるへからず、當局及同業者は今後も此の趨勢の促進に向つて努力を惜まざらんことを切望して已まざるなり

銀行合併の必要なる此の如し依て是れか合併問題の途上にある、常磐五十の兩行が群小銀行合併爭奪戰真相を闡明し其経緯を記すに先ち、茨城縣下銀行界の現勢より常磐、五十の兩行に就て述ぶる所あらんとす
茨城縣銀行組合に在る各銀行と其資本金とをあげ現下の合併賛否情勢はに次の如し

銀行		銀行	
銀行	資本金	銀行	資本金
農工銀行	二、〇〇、〇〇〇	同 大子銀行	五〇〇、〇〇〇
株式二森銀行	一、一五〇、〇〇〇	合資信用銀行	一二九〇〇
株式常陸銀行	三〇〇、〇〇〇	同 萩谷銀行	一〇〇、〇〇〇
同 常磐銀行	三〇〇、〇〇〇	株式公益銀行	一〇〇、〇〇〇
合資青柳銀行	五〇〇、〇〇〇	合資鐵田銀行	一〇〇、〇〇〇
株式川崎支店	本店一千萬圓	株式多賀銀行	一〇〇、〇〇〇
同 漢商業銀行	一五〇、〇〇〇	同 日立銀行	一〇〇、〇〇〇
同 長倉銀行	二〇〇、〇〇〇	同 磯原銀行	五〇〇、〇〇〇
同 常陸大宮銀行	三〇〇、〇〇〇	同 笠間銀行	五〇〇、〇〇〇
同 佐川銀行	四〇〇、〇〇〇	同 惠比壽銀行	一〇〇、〇〇〇
同 久慈銀行	六〇、〇〇〇	同 錦田銀行	五〇、〇〇〇

銀行		銀行	
銀行	資本金	銀行	資本金
同 玉造銀行	五〇〇、〇〇〇	同 眞壁銀行	二〇〇、〇〇〇
同 五十銀行	一、五〇〇、〇〇〇	同 下妻銀行	五〇〇、〇〇〇
同 土浦農商銀行	七〇〇、〇〇〇	同 境商業銀行	一〇〇、〇〇〇
同 土浦三津輪	一〇〇、〇〇〇	同 幸島銀行	一五〇、〇〇〇
株式石岡銀行	一〇〇、〇〇〇	同 阪東銀行	三〇〇、〇〇〇
同 高濱農商銀行	五〇〇、〇〇〇	同 取手銀行	五〇〇、〇〇〇
同 柿岡銀行	五〇〇、〇〇〇	同 布川銀行	一〇〇、〇〇〇
株式下館銀行	七〇〇、〇〇〇	同 常磐貯蓄銀行	一〇〇、〇〇〇
同 下館商業銀行	一、二〇〇、〇〇〇		

以上は合併前の縣下經濟界の陳容なるか、合併運動實施後、漢商業、眞壁、常陸大宮は五十銀行に合併され長倉、磯原、下館、幸島、は常磐銀行に合併され、更に信用、笠間、惠比壽、布川、常磐貯蓄の諸行と交渉中にあり尚一二回の交渉を重ねれば合併確實との豫想を得るに至れりと云ふ、一方五十銀行に於ても大子、萩谷、石岡、高濱農商、の各行重役と屢々會見し合併具體案の協議が極めて順調に進捗しつつありと云ふ「常磐銀行資本金七百萬圓、諸積立繰越金全餘萬圓總預金五七百萬圓を擁し本支店營業所は二十八箇所に亘り一大金融網を布く財界の巨頭常磐銀行は、其大株主なる川崎銀行を背景とし經營一切指導後援を受け基礎の鞏固なる、内容の充實せるは勿論、營業振の堅實にして進取なることは世間周知の事實なり、大正十年太田協同銀行を合併以來、同十一年には下館商業銀行を、翌十二年には水海道銀行を合併し而して十三年より十四年に入り結城下館、幸島、長倉の諸行を合併せしゆへ、本縣の東西南北樞要地に跨り、模範的銀行として地方金融界の安固と産業の發展に盡せらるることは地方人の大に感謝して措かざる所なり、要するに銀行業は經濟界の心臟なるを以て、銀行が薄弱なれば其地方の預金者は安定を得られず、生産業は資金の途を閉

塞されて、地方經濟界に進歩は決して期待するを得ず、本縣下に於ても常磐銀行の如き強大なる基礎と實力を包擁する、加之最も有方なる後援關係を有せる銀行が各地方に多くの營業所を設置することは財界の爲めに切望に堪へず、同行が上叙合併せる各銀行は何れも地方有数の最良銀行にして、眞に其地方の爲め安固不動なる大組織の下に秩序あり、統一せる營業と進歩したる事務を必要とする、時代の推移を先見洞察して合併せしことは、欣快に堪へず、斯の如く縣下財界の巨頭として喧傳さるる常磐銀行は、現在何人の經營に依りて、斯かる發展と盛運を招來せしか、試みに重役諸氏を舉げんに取締役會長は江幡新氏なり、氏少より銀行業に従事すること既に四十有餘年誠意と堅實を以て終始一貫せし立志傳中の人物、銀行家の典型不言實行の人格者、其の圓滿なる性格は多年鍛鍊せる經驗と手腕を以て、内外萬般の實務に熟練し、早朝より日没まで執務し倦むを知らず、未だ嘗て一日たりとも欠勤せし事なしと精力の絶倫なる決して人の企及する所にあらず、支配人三宅亮一氏は東京高商出身の俊才、卒業するや直に川崎銀行に入り、嘗て大阪西支店長、神戸支店長として關西財界に令名ありしか聘せられて現職に就かる、實に常總財界の新人なり、新知識なり、實務と經驗に富める取締役會長の女房役として好箇の對照詢に得難き支配人なり、其他幹部級に於ける庶務部長今井惟明、營業部長大久保美誠調査部長村島四郎の諸氏人材雲の如く林の如し各其衝に膺り精勤せらる、思ふに同行が常總財界の權威として、基礎益々鞏固に幾多の群小銀行を併吞して日に盛運に趣く亦由來なしとせんや、況して取締役、監査役の諸氏何れも縣下の財界人々にして財界平觀のことに屬す、取締役吉見輝氏は元群馬縣知事として循吏の令名を馳せ、同秋山誠明氏は水戸市今日の發展に貢獻して其功勞尠からず名市會議長と推獎されたる人、同杉浦甲子郎氏は川崎銀行常務取締役同高梨博司氏は川崎銀行調査部長なり、共に堅實なる銀行業者たる推して知るべし、同長年繁氏は沼敷郡の豪農、同間々田惣助、同荒川爲吉兩氏は共に下館町の豪商、同山中彦兵衛氏は常總鐵道株式會社社長、茨城農工銀行取締役、同中澤清八氏は結城町の代表實業家にして、茨城農工銀行取締役たり、監査役大森卯之太郎氏は二森銀行頭取、同川崎友之儘氏は

嘗て川崎銀行常務取締役、麴町銀行頭取たりし人、同秋山藤左衛門氏は水海道町の素封家にして常總鐵道株式會社監査役なり、此の如く多くの重役が同行各地支店所在地にありて、常に監督指導に盡瘁さるる結果は行運の隆々たる今日を致せる所以なりとす

記者一日水戸市南町通りに巍然周圍を壓する鐵筋コンクリートの宏壯なる同行本店を訪ねると江幡取締役會長が同行の方針に就て語るところは

銀行業と言ふものは營利事業に相違ないか、一面には常に公益的本分を顧慮しなければならぬ、といふのは銀行の有つてゐる資金は、資本金を除いては皆御得意から預かつた金である、そして多くは額に汗し手に土して貯へられた貴い金である、だから最も大切に最も慎重な考慮を以て安全且つ有益に運用しなければならぬ、自分の金なら損しても自分限りで済まうか、御得意の大切な預金に對しては寸毫も損失を醸す様な無遠慮な、貸出をしてはならないと同時に、社會の爲め産業の爲め有益な資金を供する様にしなければならぬ、つまり金を活かして使ふ様に投機や遊蕩やに費される様な、死んで行く無益な資金は避ける様にせねばならぬ、此觀念こそ實に銀行家の本義であり眞髓であらうと思ふ

それから又地方に依りて、取引事情や産業状況が相違するから、銀行業者は其地方に適應した便利な取扱と進歩した事務が必要だ、これも充分考慮しなければならぬ、又銀行は資金の御問屋であるから、常に資金の潤滑せぬ様に準備をして置かねばならぬ、是等の觀念を忘れるやうでは眞の銀行ではなくして、社會の爲め産業の爲め無益な銀行となるのである、縣下の總ての方銀行へ預金するも、銀行から借金するのも能く銀行の立場を諒し、銀行の方針を解して戴き銀行も此責任觀念を強感して進むなら縣下の金融界産業界は漸次順調に發達することを確信する云々

亦以て同行の營業方針を知るに足るべし

☒ ☒ ☒ ☒ ☒ ☒ ☒ ☒

勤 儉 力 行

(一)

曹洞宗管長 新 井 石 禪

一、今是れ何の時節

わが國有史以來二千五百八十四年、文物制度の發達したることは、今日こそ實に空前の盛況といふべきであります、坐らにして世界文化の空氣を呼吸し、東西兩洋も猶ほ比隣の如く、新奇なる智識の產物はそれからそれへと目前に開展せられ、その進歩の著しき、變化の速かなる實に驚かる程であります、昔は十年一昔と申したか、今では一年一昔で、而も昔の十年よりも今日の一年の方が變化の程度が勝れて居るから、今日の一年は昔の十年以上に價する、然れば今の世に五十年の壽命を保ては、昔の五百年に相當する譯である、殊に教育も日を追うて發達し國民の權利も次第に伸張し、各自の志氣と努力とに依つては、無限に向上し得へき自由を有して居る、かかる文化の時代に生存する吾々は實に幸福の極みである、吾々は深くこの幸福なる果報に感謝せねばならぬ、併し他の一面から觀れば、吾々は吾々の祖先も曾て経験したことのない程の難局に立つて山よ

りも重き大責任を有して居ることを感せずには居られない
我か國の現状は、内憂外患並ひ至るといふ、狀態であります、これを内にては政治の上にも、經濟の上にも、教育の上も、産業の上も、未だ完全なる位地には達して居らぬ、國民生活の問題も、種々の點に於て甚しき不安が感ぜられます、殊に四方八面よりいろいろの思潮が流れ込んで來るために、國民の思想が何となく浮足となつて剛健の氣象に乏しく、動もすれば浮華放縱に流れ、激挑激詭に走らんとして居る者も少なからぬ狀態であるこれを外にしては米國に於ける排日的移民法の實施せらるるあり、唇齒輔車の關係ある支那との親交も未だ圓滑ならず、其他何れを見ても國民をして安心せしむるまでには進んで居ない、わが國として實に容易ならざる重大時機であらうと思ふ、吾々國民は益々その志氣を勵ましその精力を練磨して内國力の充實を圖り外國威を伸

張することに全力を注かねばならぬ、なほ又這般の如きは圖らざる大震災災に遭遇し、非常なる大打撃を受けて一層吾々の責任を重からしめた譯であります

併し吾々は如何なる難局に當るごも、決して悲觀してはならない、また元氣を落してはならない「いかならん事に逢ひても挽まぬは、我が敷島の大和魂」
とは先帝の御諡してはありませんか、また御製に「
難しと思ひ挽まは何事も、成る事あらじ人の世の中」
とお誠め給はりし如く、此難局を突破して全世界に文化の模範を示すの勇氣と覺悟とが無ければならませぬ、それには國民一致の力が大切であります、上下共に志を合せ、心を一にして國家の發展を圖らは何の恐るる所かあらう「千萬の民の力をあつめなはいかなる業も成らんとぞ思ふ」との御製を奉して、奮勵努力せねばならませぬ、自分勝手な事をして、好い氣になつて居る時では無い、つまらぬ事に不平を鳴して、騒いで居る時では無い、權力和財力を振廻して、虚威張をして居る時では無い、先つて第一に剛健なる精神を鍛練することか肝要であります

聖上陛下は「國家興隆の本は國民精神の剛健に在り」と詔らせ給ふたてはありませんか、此の剛健性を涵養振行するには「勤儉力行」の體驗が最大要件であらうと思ひます

二、勤勉は幸福の母

「夜もなほ業をつとめよ世の中は、寝て待ぬこそ果報ありけれ」
勤勉は實に成功の本幸福の母であります、けれども遊ぶことを以て自由を得たと思ふたり、贅澤することを以て幸福と誤つたならば、その自由こそ束縛煩悶の種となり、その幸福こそ若痛難儀の本となるであらう、眞の自由は勤勉に依て得られ、眞の幸福は勉強の結果たることを忘れてはなりません、勤勉の第一は目的の確立であります、吾々大和民族たるものは、常に忠孝の二道を以て百行の土臺となし、この忠孝二道に背かざる正しき業務に就いて將來進むべき目的を立てねばなりません、實業にせよ學問にせよ家事にせよ、勞働にせよ、能くその業務の神聖なること、自己の天職とを理解して、十分の興味を以て活動せねばならませぬ、而してその勤勉

力も、撓まず屈せず少しの油断もなく、最も忠實に最も親切に勤むることか大切であります、これを不遜の精進といふのであります、それと同時に勤勉に耐え得らるるやう、常々身と心とを鍛錬せねばなりません、兎角人といふものは、倦み易く怠り易きものであり、またその業務も頗る困難を感じる時もありますから、困難をも凌ぎ、怠慢の念にも打克つ所の忍耐力が無ければなりません、故に古人も「如何に才能優勝なりとも、百折撓まざる勉強と萬事抜目なき注意なくては、事業の成功覺束なし」とも言ふてあります

明治天皇は非常に勇剛の御性質にてあらせられ給ひ、避暑避寒などは殆んど遊ばされなかつた、或夏餘りに暑氣烈しかつたので御避暑を奏請せしに、陛下には御笑へ乍ら「あつしともいはいれさうけりにへかへる、水田に立てる賤を思へは」といふ御製を御示し遊ばされたので、何んと申し上げる言の葉も無く御仁徳の廣大なる御勇氣の絶倫なるに感激して引下かられた事がある、また或る冬は稀なる寒氣であつたから御避寒を奏請せし時、陛下は避寒な

とをする者は國民の一部に過ぎまし、朕は多數に従かふぞ、と御仰せ遊ばされたと漏れ承はつて居ります、これ皆國民を慈愛み給ふ廣大なる御仁徳より自然に勤儉の則を御示し下されたものであります、勤は無價の寶であります、稼くに追ひつく貧乏はない愉快に勉強する人は必ず榮えます、樂んで勉強する國民を有する國家こそ發展します、釋尊は「若し人精進すれば事として難き者なし」と仰せられ、精進波羅密を以て菩薩の六六行の一として示されました精進とは正しき業に對する勉強力のことである、故に吾々は各自の職分を尊重して、愉快に勉強し熱心に働き、眞面目に勤めて、自強不息なる、べきである、斯くする時は智識もすゝみ、能率も増進し、信用も加はり、技能も發達して、神聖なる幸福は招かすして自づから其身に具はるやうになるものであります

農村問題と國民教育

法學博士

(上) 河田 嗣 郎

國民教育の普及と、農村荒廢の助長
此頃農村問題が旺に研究せられると同時に、國民教育上の問題が研究せられ、現に師範教育改善に就いても種々の計畫が立てられるに至つた、私は今此の兩問題を突き合せて、兩者の連絡關係を考へて見たと思ふ

現時の教育は謂ふ迄もなく人格主義的な見地を基礎として、人格の琢磨人格の充實人格の擴張を行ふ事を目的とし、其爲に智能を啓發し德器を成就することに努めて居る、そして現今の時勢が一般に發展主義的な思想の上に立つて居る所へ持つて來てや、物質主義的な傾向が伴ふて居るものから、人々は人格を擴充し其の發展を圖ることを以て人生の意義と考ふるに就いては、兎角その意義を有形的に解釋して、立身出世を爲し富貴榮達することを以て、人間生存の本旨と考ふるに至つた

人格の擴充を爲しその發展を圖るといふことは其の本來の意義に於ては必ずしも其の有形的なる表現を

必要とせない、併し現時の普通教育と世間の人々一般の考へに於て其の意義が兎角有形的な表現の下に於て成立つものの如く考へらるるは、洵に已むを得ざる所である、世間普通の人々に向つて、皆達觀せる宗教家や哲學者の如くに考へよと註文するのは無理なことたらざるを得ない

そこで現今では農村の隅々に至るまで、此有形的表現の意義を持つた發展主義的な思想が行涉りその思想は國民普通教育に依つて益々普及せられつつあるとしてその教育を受ける者は、男女共に少年の頃からして立身出世を爲すを以て人生の意義を成す所以なるかに信し、富貴榮達するを以て人生の任務なるか如くに信することとなつて、小學校に於て國民普通教育を受ける間に、段々深く其信念を頭の中にたたき込まれるに至る

村の小學校の先生達は兒童に教へて言ふには、お前方勉強せよ、勉強して智識を琢磨能力を養へ、智能

さへ得られるならば今の世は誰にても出世が出来るやうになつて居る、公候相將何と稱あらんやてある、現今一世に時めいて居る政治家でも天下の富を集めて居る富豪でも、多くは匹夫より身を起した者である、精神一到何事か成らざらんや、大いに勉強せよ、そして志を大きく持てよ

兒童は斯んな教育を受けるものだから、學校で物を教はつたり勉強して知識を得たりすることは、總て上級の學校にも進み、又世に出て名を成し富を造るか爲めの準備として行はるるものであるといふ風に考へるやうになり、教育といふことは、人間一人前として高潔な品性を具へ、堅固な徳性をもつた人となる爲めに行はるるものとは考へないのを普通の例とする次第である

然るにその兒童が小學校を卒へたる上に、さて出世の爲め富貴の爲めに働かうとしても、農村にはそんな機會は殆ど無い、農村に留まる限りは、有形的な立身といへば村長が行止りた、富貴となるといつた所て一町歩の所有地を三町歩と爲し五町歩と爲すか關の山である、そこで多くの青年は農村に居た所で

驥足を伸ばすへき餘地はなく、農業に與はつて居る分では一生營々として働いて依然たる水呑百姓たるに過ぎずとして、農村を捨て農業を離れんと希ふに至るの洵に餘地なきものあるを見る次第である、そして都會に出づる機會ある者は、續々と都門に向つて田舎を流れ出るし、その機會のない者は田舎に留まつて居るは居るものの、田舎に留らざるべからざる運命を悲み農事に従事するをつまらなく思ひつつ厭々乍ら詮方なしに田舎に居り農民としてやつて行くことになつてしまふ

されは現今農村に留つて居る青年の多くは田舎が好きで農業が楽しいからさうして居るといふのは少く多くは致方なしにさうして居るのである、従つて多くの者は身を入れて農業を営まんとはせず、身を入れてやつて見た所てほんとうに收益報酬の少い現時の農業は、眞實働かぬ甲斐のないものとして之を呪ふことも多く之を愛する氣になれぬのが大多數者の心情である、而も斯る傾向は、獨り青年男子の間に著しき許りてなく、寧ろより多く青年女子の間に著しく此頃女學校を卒業した女子が田舎に留まり住ふのを

厭ふ風の甚しきは勿論のこと、たゞ小學校を卒へた者でも、機會さへあれば都會生活に入らんとする希望を有するは著明な事實であるされは現今何れの國に在つても、女子の方か遙に男子よりも多く農村する實狀を呈して居る

こにかく右のやうな有様で、當今一般の思想と教育とが發展主義的な基調を有する所へ、都鄙の實際生

活の有様と農業と、商工業との實狀の間に夥しき懸隔ある爲めに農村生活は段々に嫌惡せられ、農村荒廢の傾向年々共に著しからんとする有様在る、されは今日の國民教育は、それだけに就いて之を言へば、農村に普及すればするに連れて却つて農村荒廢の勢ひを助長する傾向あるを否み難いのである

水産教育及び 水産業の將來

東京帝國大學助教授 田 中 茂 穂

本邦が水産物を消費することは、實際世界中で一等國と云ふよりも、更に数十倍多いと言はなければならぬ、従つてこれか漁獲及消費、其他應用方面に就いては餘程進歩して居て、これか研究をなす所の水産學の如きも、夙に歐米諸邦に率先して始まつて居るのであるか、今日に至つて、これか既往の歴史と、現狀、更に將來のことをまて、思ひ及ぼして見ると、本邦の水産業に關する總ての仕事は、餘り好い

成績が擧つて居るとは言へない様に思ふ
御承知の通り、日本以外の文明諸國では、副食物は主として、獸肉であつて、魚類を用ゐる場合には主に河魚を用ゐるので海魚を食用に供する事は非常に少である、さうして此河魚は其種類に於ても、將に又その個數に於ても、海魚に比しては、著しく少ないものであるから、是等の文明諸國の副食物とする所の物は、殆ど、獸肉に限つて居ると言つて差支ない位である、

併し乍ら、今から五十年前から魚類の消費が著しく増加するに至り、殊に歐洲大戰前後から、各國共に魚類を獸肉の代用物として獎勵するやうになつた、之れがため、歐米の諸國では水産學に著しく注目するやうになつて、之れが研究と消費の方法を取調へて居るのであるか、殊に北米合衆國と、濠洲とは、この問題に最も熱心であつて、尙今日では布哇に汎太平洋協會なるものが設立せられ、これは太平洋に臨んで居る所の文明諸邦の有らゆる幸福になることを企畫するのであるか、此の協會も特に注意して居るのか食糧問題で、此の意味から言つても、魚類の利用方面に非常に重きを置いて居る。

然るに我國は、殆んど總ての魚類を食用とするので其の種類は、約千種位に上り、一つの地方で、極めて普通に消費するものでも二三百種に上るからして餘程の努力を費やさなければ、是等の魚類の保護及び圓滿な利用法は、近い將來に於て行はれないであらうと思はれるのである。

斯う考へると、歐米の水産は我が國よりも餘程遅れて注目し始めめたにも拘らず、學理に於ては餘程系

統が立つて居て、現今非常に努力して居からして我が國の水産學などよりも、遙に進歩するであらうと考へるのである。

竊つて我が國を見るに、曾て農商務省に水産調査局が設けられたか、何時の間にか、其れは廢止されて僅に、同省附屬の水産講習所に於いて、此の仕事が続けて居る次第である。

斯様に考へると、我々は日本の水産界の現状及び將來に對して憂慮の念が非常に起るので、斯様な状態が何時迄も續いて行つたならば、日本の水産物を十分に研究し之か利用を遺憾なく講ずることは容易でないと思へる、又之れが調査を十分にした成績に基いて水産學上の子弟を教育すべき水産學校の發達と云ふことに就いても、大に憂慮すべきことであらうかと思ふ。

併し乍ら深川には水産講習所があつて、水産の調査と、之れが教育に従事して居るのであつて、從來とても、少なからぬ成績を擧げて居る、この水産講習所は今同海産學の泰斗岡村博士を所長として戴くことになつた、元より從來の所長も色々の方面に大

きな貢獻をしつたのであるか、殊に今回の所長は事務の才に加ふるに一代の學者であるから種々の方面に新しい目論見からうと思はれるか、或るべく此の特殊學校の特殊なる所以を大に發揮して貰ひたいものである若し此の學校が純粹の水産學と云ふ方面に走ると云ふことになれば、應用方面に對する設備が忽かせになることと心配するのである、私は斯様な方面には全く關係のないもので、殊に水産には水産學に對しては専門のものでないけれども、魚類を研究して居る關係上、是等の問題と、接觸することか厭であるから、斯様な事を叙へて見る次第であるか、

日本の水産物を廣く眺めて見ると、我田引水の傾向があるとは、自分は決して考へないか、水産物の大部分（過半数と云ふよりも數等以上に）は魚類を本として居ると私は思ふ。

海藻の種は、どの位あるか知らないか、此の中我が國で食用として居る物は左程多いと思はれない、この中で淺草海苔は有名なものであるか、此れは恐らく必需品と云ふよりも、寧ろ贅澤品の中にはひるへきものではなからうかと思ふ、動物の中でも、魚

類以外に水産物ではあるけれども、貝の類、鳥賊の類、鯨、其他若干のものを除いては贅澤品となつて居るものは多いのである、斯く考へると、魚類の利用は非常に廣汎なものであつて、殆んど日本人は捕れる魚を總て食用に供すると言つても嘘でない程である。

我國としては魚類の應用上、必要なことか斯程、大きいのであるから、是非共、これの習性と漁獲法、供給法及び利用法と云ふことに就ては、其の研究を一日も忽かせにすることは出来ないものである、これが研究は實際は何れの處ですべきかと云ふことも、大體明かてあらうけれども、差し當つては水産講習所などのする仕事ではなからうかと思ふのである。

其れであるから、是非共之れが計畫を立てられて、さうして此の仕事を數年間、若しくは十數年の間に完結して貰つたならば、我國の福利を増進するは無論のことであるし、水産教育に従事して居るものか非常に喜ぶことであらうし、數ならぬ吾々迄も、自分の専門の研究に附帶した事柄がわかるので、非常に喜ばしく思ふ次第である。

經濟的經營の根本に就て

茨城縣立農業試驗場長 高橋長八

一六

農業をするに當り、經濟的經營の基礎となるものか其の經營者の能力技術並に試驗成績の應用にあると思ふ、何時の時代にも能力のないものか、起つて行く時代かない、夫れは言ふを要せず、茲は私は特に能力を掲げたのは、往時よりも一層能力如何か、其經營者の境涯を岐れさせると思ふからた吾々はよく農業は馬鹿でも出來ると云ふ言葉を聞く、成程其言葉の如き時代もあつたかも知らん、古い時代に遡れば吾々の祖先が單に働いて作つて、夫れを食へ夫れを着て生活した時代があつた、其の際には唯働きさへすれば宜しかつたのである、之れならば或は馬鹿でも出來たかも知らん、然るに今日は其の時とは異り、日々に細かに注意し活動する世に移り變つて來てを、人情のいや厚くして殆んど無意識的に助け合つた時代とは異つてを、吾々の農業は自家供給てやつてをつた時代から、貨幣經濟となり何んにもかんても金にしなければならん世の中となり、農業

は全く一つの營業となつた、今日農業は馬鹿でも出來ると思ふは誠に誤れるも甚しきものであると思ふ而して私か農業は他の何れの職業よりも、六つかしい職業であると思ふ者である、何せならば農業の性質或は其立場を観察して見るに、極めて不利の立場にあり又利益の少ない様な性質を有してを、夫れて利益を得て行かうと思ふのであるから、最も六つかしい職業であると思ふ、儲けないて損してもよいと思ふ事なれば、如何なる職業でも馬鹿でも出來るのである、夫れ故私は最も能力ある健康なる者かやらなければならんと思ふのである、デンマークの警句に「吾人は頭腦を以て耕作す」とある誠に味ふべき言等である今日の農業者は其の能力の向上に突進しなければならん、尙又農業經營者に經營するだけの技術を有して居らなければならん、我が國の農業者が假令資力が充てあつても、大經營をやる事の出來ないのは、之れに對する技術を有しないのも一つ

の原因である、而して此の農業經營者にこりては試驗の成績なるものか極めて有力なる材料である、此處に一例を上げれば深耕の場合に於て、何寸耕にした場合に經營上最も經濟的であるかと云ふ事は米價勞力賃の高低に依て自ら異なる又肥料の價格の高低に依ても異つて來るのである、然れ共茲に根本的の試驗成績があれば大体の見當がつくのである、即ち三寸五寸八寸等の肥料の増量試験又は普通肥料試験を施行せる永年の結果ある時は、之れを基礎として經營者の能力如何によつて、其の採るべき道を知る事を得るのである、此の如きは一例に過ぎざるも其他施肥量の如き、種々の方面に於て、經營者の能力技術の如何に依て、經濟的に施行し得る試験成績がある、唯經營者の能力幼稚なる場合に於ては之を利用する事が甚だ少ない、故に經營者の能力が進むに従つて、試験成績の利用範圍が次第に擴大せらるゝものである、又一方國家の食糧問題より推考するも、將た又天災地變の應急策を講ずる場合に於ても、試験成績なるものか極めて重要な位置を占めてをる事は言ふ迄もない事である、試験なるものか一時的に

出來るものでない、永い年月を要するものである故に、今直に利用せられざるも施行して置く必要がある、農業者は試験成績に基いて自ら計畫して以て自ら耕す事を心掛けなければならん、此の如き狀態まで農業者は智識を向上せしめなければならんと思ふ然れども此處に注意する事か、試験成績なるものか如何なる地方でも必ずしか適當するものでないから之を基礎として自分の田に適應する様に多少訂正して行かなければならん、所謂農業者の研究心の必要なる所以茲に存するのである已れの田圃の性質は朝夕常見廻つてをる自分か一番善く知つてをるのである、今年か此の如き結果になつたから來年は此の如く改むると云ふ風にして行つたならば、遂には完全の域に到達する事が出來るのである、以上述べたるか如く私は經濟的經營の根本は如何にしても經營者其の者の能力技術に俟つ、而して其の計畫は試験成績の應用によらなければならんと思ふ、故に農業者此の意味に於て、大に能力の増進技術の熟達將た又試験成績の利用に勤めて貰ひたいのである

本邦礦業界の趨勢

常磐に於ける各炭礦

(一)

現下世界の主要燃料となつて居るものは石炭であるか、最近の調査に據ると過去一百年間に、地下貯藏の分量の約六分の一は消費されて、無煙炭の如きは三割も使ひ盡されたとの事である、素より石炭の外に褐炭や泥炭もあつて是れも立派に燃料として使へる而して其量は甚だ多い、乍去今日吾々か注意しなければならぬことは、石炭の消費高が一年一年と殖えて殆んど飽登りの状態であることである、して見ると石炭の採り盡されるは、單に時の問題で、採り盡されるといふ其の事は、如何にしても避く可からざることである、すると褐炭泥炭も亦同し運命を以て居ると云はなければならぬ

一國に於ける石炭の生産額の多寡は、其國の富強を反映するの鏡で、貧富強弱を知るのバロメートルである、即ち生産額の多量なる國は經濟上に於ては富

國であり、政治上に於ては強國であることは、各國の齊しく認めてゐるところで何れも石炭の産出を以て國策の一としてゐるのは怪むに足らぬところである、尤も最近に於ては動力用燃料として、石油又は水力電氣を利用するの傾向を増加し、殊に石油は船舶燃料等に大に用ひらるに至つたけれども、全世界の石油産量は、現在毎年消費せらるる、石炭の二十五パーセントに過ぎず、石油の需要が石炭と匹敵するには尙前途甚だ遼遠なるものかあらねばならぬ而して今、我國に於ける石炭需給の關係を見るに日本全國の出炭は由元の燃料及その年内の坑所貯炭を除きたる供給量は凡そ左の如くである

年次	供給量
大正三年	二一、一〇〇千噸
同 八年	二八、二〇〇千噸

同 十二年 二七、五〇〇千噸

即ち、過去十年間の趨勢は大正八年を頂上として八年までは産出増加の傾向を辿り九年は財界の恐慌の爲め激減したか、十一年より新規開採の歩調に移つたので、十二年に於ては漸く八年に近き出産量を示し大正三年に比し三割の増加となつてゐるのであるか一方需要の方面を見るに左の如き數字を示してゐる

年次	需要噸數
大正三年	一九、七〇〇千噸
同 八年	三〇、〇〇〇千噸
同 十二年	二八、〇〇〇千噸

即ち、需要方面も大正八年を頂上としてゐるのであるか、十二年に於ては矢張り、八年に近き需要噸數に歸つてゐるのであつて、而かも大正三年に比し四割三分の増加となつてゐるのである、而して右數字の示す如く石炭の需要數量は過去十年間に於て四割強の増加率を示し、今後内地産業の發達に大なる頓挫を來さざる限り、或は又特別なる事情の發生しない限り相當の増加率を以て進行すべきは想像に難く

ないのであるか、一方供給の方面は、鐵道運賃の高率港灣設備の不完全に基く諸掛り負擔の過重、販賣網の無秩序等の爲め出産増加率は需要増加率に伴はず、延いては出炭減少の傾向をさい現出するに至るは大に注意すべき事柄と云はねばならぬ、然り而して以上の如き出炭増加率の振はさる事情に早くも着眼し、着々如上の缺陷を除去するに努め、近年著しき發達を爲せるは、廣大なる磐城の炭田を奄有し、常磐石炭界を壓卷する磐城炭礦である、其事業の現況を見るに難くはない、今磐城炭礦に就て其事業を点検するに先立ち、始らく筆を擧げて常磐炭田の事情を知らんとす

大正十二年に於ける本邦の出炭量を地方別に示さん

九州炭	一七、三〇〇千噸
北海道炭	四、五〇〇千噸
臺灣炭	一、四〇〇千噸
常磐炭	三、〇〇〇千噸
其他	一、三〇〇千噸

合計

二七、五〇〇千噸

常磐石炭は全國出炭量の壹割強を占め、數字上常磐炭の豊富なることを証明せるか、更に磐城炭礦の出炭量は九十余萬噸なれば常磐に於て、優に一頭地を抜き常に常磐炭量の三割内外を占めてゐるのである

磐城炭礦の沿革と現在

磐城炭礦株式會社は資本金九百萬圓明治二十六年十二月の創立である、内郷、小野田の二大炭坑を有し、採掘礦區七百九十八萬四千坪餘、試掘礦區五千貳百參拾四萬四千坪餘の廣大を占め、職員五百五名、職工九百八名、定夫其他九十四名、坑夫四千九百六十二名にして、大正十三年一月より六月に至る六ヶ月間の出炭量は實に四拾六萬六千九百七十三噸の多額に及んでゐる

今や遡りて沿革を討ぬるに舊記の存するものなく、文獻の徴すべきものなきも、口碑の傳ふる處によれば、已に數百年の昔に發見せりと謂ふも、敢て薪炭の用に供せるにあらずして、篝火として野獸の田畑を踏み荒さるるを防ぐに止まりし如し、嘉永年間石城郡草野村の人大森平藏なる者、白水に於て石炭の

露頭を發見し、之を船舶に供給せは奇利を博せんことを知り始めて採掘に着手せりと云ふ、其後明治初年に至り礦業に志す者漸く多く現はれ白水、不動澤熊掛、田谷澤等の諸炭山續々發見せしか皆露頭附近の手堀に過ぎざりしか、明治十六年小野田炭山當會社の有に歸し、初めて洋式の採掘に着手し、同二十年五月小野田、小名濱間の輕便鐵道成るに及び運炭か噸に増加し、同二十九年小野田堅坑着炭し同、參拾年二月常磐線の開通を見るに至りて、直接市場に搬出するを得て、社運益隆盛を來たし、同三十二年内郷專用鐵道の開通と共に内郷第一斜坑の採掘に着手し、同三十四年正月には町田第一堅坑の着炭を見るに至れり、同三十八年九月坑内水災の爲め一時休業の已むなきに至りしも翌三十九年十月復舊するを得、大正三年九月第三斜坑を開坑し、同四年八月には三星炭礦を買収し、翌年十月綴第一斜坑を開坑し爾後歲月と共に諸炭の施備完成を告げ、大正八年三月高坂坑着炭し、同十一年一月には綴東斜坑着炭し同年二月高坂第二坑着炭し、現今の繁榮を見るに至つたのである

炭坑設備の完成

原動機として蒸氣—攪炭機、捲揚機、揚水機、焚炭機、電氣—捲揚機、揚水機、扇風機、及び電氣唧筒、蒸氣唧筒あり、通氣は各坑皆排氣扇風機を使用し、坑内には局部扇風機を用ひ、又地表の陷落を絶體に防止し瓦斯爆發の悲惨事をも阻止し得、設備遺漏遺算なし、排水、運搬、攪炭、給水、發電等何れも新式の設備を施し、試錐所、貯炭所等の設備も悉く完備し、加ふるに従業者の待遇に就ては、社會政策的見地より獎勵、救済、慰安等各種優遇に意を致し以て勞資協調の實を擧げつつあり又従業者子弟の爲めの學校設備より殊に礦山衛生保健衛生には他の範たる診療機關の完備せる醫院の設置あり、物資配給所ありて一定の方法に依つて現金又は通帳を以て日用品を供給す、電車、電話、電信の通信及貯金機關及發電所の設備に至るまで完全し役員並に坑夫の社宅等有ゆる設備完成せないものはないのである

廣汎なる販路

賣炭上の業務は東京本社に於て取扱つてゐるか、其販路は生産地を中心とし、東京府下、鐵道省、内務省、陸軍省、其他諸官廳を始めとし各

製造工場及東北本線、常磐線、水戸、高崎、兩毛、信越、磐越、奥羽、陸羽、中央、總武、東海道の各線路にして殆んど販賣網の完成を遂げたのである

斯の如く常磐炭礦界の雄として喧傳さるる磐城炭礦株式會社は、現在何人の經營によつて、斯かる盛運を壇にしつゝあるか、蓋し炭礦の如きは、單に出資關係其他でこれを發展せしむることは、殆んど至難て經營者に明敏なる企業的手腕以外に實務上の練達者たるここが何より肝要である、この点に於て我が磐城炭礦株式會社を見る、試みに其の重役諸氏を擧げるならばまづ取締役社長に淺野總一郎氏專務取締役に渡邊六藏、倉田龜吉の二氏、取締役には高幸五郎、白石元治郎、渡邊勝三郎、石井駒次郎の四氏、更に監査役には増田明六、小坂梅吉の二氏、あつて同社の經營に當りつつあるか、何れも當代有數の財人を網羅してゐる点に於て他會社中、稀に見る偉觀を呈してゐる、又營業、礦業の兩部に亘り幹部を見るに何れも濟々たる多士、雲の如く林の如し、營業部長角地藤太郎、礦業部長技師長永室清、經理課長兼運輸課長青沼鋒太郎、庶務掛長濱崎善三郎、會計

掛長篠原二郎、調度掛長熊澤清壽等の諸氏協力一致して時勢の赴く所を達観し社業の遂行上遺憾なきを期すべく、鋭意設備の改善と事業の發展を圖る、同社の經營に一大躍進を見るべきは期して持つべしと嘆稱されてゐるのである。

石炭、我邦産業の發展上一大原動力たるに想到すれば、實に同社の使命は彌か上にも重からざるを得ないのである、惟ふに同社の如きは其の根柢深く堅く

常磐刀圭界の覇王

常磐病院

汽車未だ水戸構内を出でざるに右方直ちに車窓を壓する巍然たる大建築がある、いふ迄もなく之れが地方醫界の權威たる常磐病院である。

本院の創立者は今現に茨城県醫師會會長たる中崎俊彦氏で、氏は少壯既に水戸刀圭界に頭角を表はしてゐたが、夙に地方醫事衛生の頗る幼稚にして殊に内臓外科、整形外科の如き醫師の見地よりして患者の期待と相距る甚だ遠きものあり、又内科の如きも手腕

幾十星霜の、試練を経て、盤石の礎石を有する以上は、只隆運の一途あるのみと斷して決して過言ではないのである今や世界經濟戰は漸く恢復の曙光を認め國際的商戰は愈々其繁きを加へんとしつつある、此の秋に當り我が炭礦界は之れを千載一遇の好機として躍進すべき運命にある、従つて同社は偉大なる努力を以てこの運命を利用し、我邦の進展に貢獻せらるるに吝さかならざるを信するのである。

力量の点に於て名醫大家と稱せらるる人も少なきにあらざるも現代醫學上から見て病理、探究の上に、或は病源發見の上に、將た又臨床の上に遺憾の点の多い事を常に痛嘆してをつたので、機會あらば完全なる理想的大病院を建設し、地方に於ける醫事衛生の欠陥を補ひ兼ねて地方文化の開發に貢獻せんと欲してゐたところ、大正七年水戸大火に際し氏の經營する醫院亦類焼の厄に遭つたので、氏は寧ろ此機に

於て、豫ての理想を實現せんと欲し塙嘉一郎、金澤源介、弓創徳次、長山佐七、一木安介、三宅保、柴孫二郎、塙七郎其他數氏の賛成を得て大正八年九月株式組織の病院として内外の設備を完成し茲に本院の創立を見たのである。

地は遠く筑波の双翠に對し近く仙湖の碧潭に臨み交通の便、眺臨の佳、療養の地として、眞に理想に適せるものといふべきである。

最初醫長として迎ひたのは醫學博士渡邊純一郎氏にして外科部長を兼ね又内科部長としては醫學士山田靜榮氏を迎ひ其他各科部長、醫員、藥局、庶務會計等悉く人材を網羅したるは當時縣内刀圭界の一偉觀として一般から認識せらるる處であつた、然るに不幸渡邊博士は二翌の冒す所となり數ヶ月に亘る醫務其効なく大正十一年二月二十七日本院に於て逝去されたのは實に常磐病院の損失のみでなく本邦醫界に於ける一大損失で識らざるとを問はず今に尙ほ痛惜止まざる處である。

渡邊博士の歿後、今の醫學博士井上重喜氏を迎ふる事となつた、井上博士は故渡邊博士と親交あり、最

近歐洲留學を了へて歸朝した最新の學理と明晰の頭腦との所有者として斯界の寵兒である、加ふる山田内科部長は温厚篤實、其内科の研鑽は夙に湛奥を究め臨床上の手腕力量は、世既に定評のある處で殊に其人格の崇高なる同僚及び部下の齎しく歸服する處其他泌尿科部長醫學士萩原省三、小兒科部長醫學士滑川舜次郎、産婦人科部長久須美震一の諸氏何れも其専門科に於ける大家で各醫員藥局員亦皆醫學の士にあらざるなく二十餘人一身同體の如く懇切丁寧の務に従事するの狀は寧ろ奇蹟院で、同病院の創立日尙ほ淺きに拘はらず關東東北はいふ迄もなく私立病院として全國有數を以て目せらるるに至つたのは決して偶然でないに信せらる。

加ふるに内科に於ける醫學博士八田善之進氏、産婦人科に於ける醫學博士川添正道氏等斯界に於ける泰斗が本院の顧問として毎月日を期して診療に従事せらるる事は本院をして彌が、上にも千鈞の重を加へしむるものである。

爾來五閏年其間増築をなす事二回、特に醫療器具機械に至つてはエツキス光線は勿論テアタルミ、高

山太陽燈を主として其充實完備に意を用ゐる常に嶄新的確なる優良品を選定購入して患家の満足を得るに努めてゐる、又其病室は現在普通病室洋館を合せ總二階建五十八室に及び彩光通風及び眺望に特に留意して設備しあり別に日光溫室を設けて一般の便益を圖つてを、又傳染病室即ち隔離室は特に設計に意を用ゐたるもの二十一室を有し之れに附隨したる消毒室の如きは蒸氣力による消毒釜を設備し患者の使用したる衣類器具は一舉にして完全なる消毒をなすを得るは本院特色の一にして本院は此院壁なる隔離舎を利用し各町村にして傳染病發生し其町村に於て避病舎の設けなき場合或は町村財政上其他の事由により避病舎の開舎に支障ある場合は社會奉仕的に入院の委託に應ずる筈である

又病室と病室との中庭には一池水を湛え水禽金魚を放ち山を築き樹を栽え奇巖怪石を配して一大庭園を設け患者の觀賞に供する一方之れを防火の用に充つるの設備も既に完了した

其他入院患者、附添人及び院務に従事する職員、賄の調理は蒸氣力による炊焚設備で清潔の保衛と滋味の

供給に留意し用水はモーター裝置の一大タンクを設け總ての給水は水道と異らざる迄に整つてを、以上説く如く設備の点に至りては至れり盡くせりの概あるも入院患者日に多きを加へて既に狹隘を感ずるに至つたので十四年度に於ては更に増資の上増築擴張の計を立ててゐる程である

尙ほ本院の誇りとするは研究室である、研究室は正門右側最も眺望の佳なる處で總二階洋館の階下は標本室、試驗準備室、試驗室、寫眞室、化學室の五室に別に標本室は本院で手術をしたもので苟くも醫界の研究參考資料となるものは細大さなく之れを保存し試驗室に於てはワッセルマン、ウキタール反應試験其他檢院入院患者は勿論廣く院外醫院及患家の需に應じて試験檢定に従事してをる殊に化學室の如き山田、萩原、滑川、久須美の各部長を初め各科擔任醫員が各分擔科に於ける研究室として寸暇ある毎に此處に出入して居る實に其内容の充實せるは地方私立病院として恐らく他の企及すへからざるもので此研究室より幾多博士の輩出するのは蓋し餘り遠きにあらざる事と思ふ次に其階上は圖書室、醫長室

部長室、醫員食堂等に別たれ其圖書室には内外新古の醫書を蒐集し殊に醫學雜誌は本邦は、勿論歐米發刊のものに至る迄之れを具へて、醫員の研究に資してをる、此圖書室も亦病院としての誇りの一つである

最後に本院の特長ともいふべきは院内に漲る平和氣分である、井上醫長以下全院悉く斯界の鬼才俊彥を集めてあるのて手腕力量又其人格品性の点では世に定評ある通りであるか其悉くの人々が常に溫顔以て患者を迎ひ古來醫師の痛弊たる氣取り屋や威張り屋といふ風が微塵もなく蕩々たる和氣の間に診療に従事することは他的大病院にして多くの醫員を有する處に於て見る可らざる美風で上の爲す所下之れに倣ひ看護婦の如きも患者に接する極めて懇切丁寧に入

院患者の多くか其病院に在るを忘れて恰も家庭に在るか如き思ひをしてをるといふ事は常に耳にしてゐる處である

本院の機關雜誌茨城醫事公論も亦見逃す可らざる本院の一大特色である、毎月一回の發行に過ぎぬが毎號醫界に於ける新研究又は醫界稀に見る診療の經過其他醫事衛生の一般に亘る事項を發表して居る、これ等は一般醫家の好參考たるはかりてなく醫事衛生に志あるものの好箇の讀み物として推奨するに足るものである

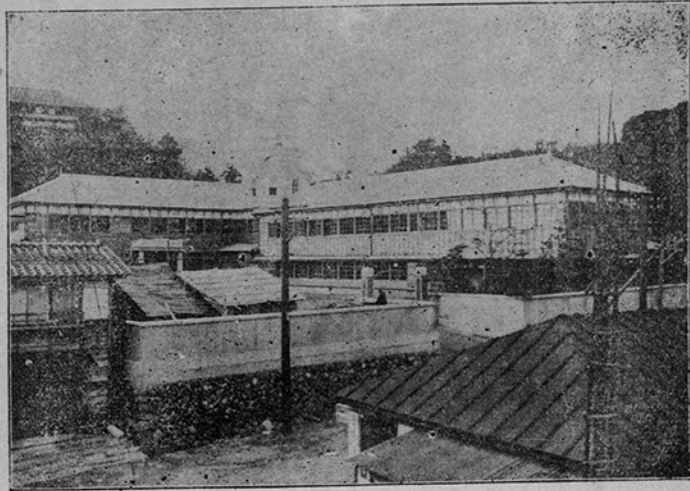
以上は吾人の觀たる常磐病院の梗概に過ぎぬか今後尙施設すべきもの多々ある事と信するから漸次を逐ふて大理想に到達する様各員の努力を希望して止まぬものである

一 寡婦の身を以て女子實科教育に従事する三十有餘年

遂に獨力數萬圓を以て新築せし平陽實科女學校と校長酒井女史

城山の麓、高燥の地に「字形」の宏壯なる建築物か、東南平町全市街を俯瞰せるは、實に酒井ミヨ子女史

か經營せる平陽實科女學校である、同校は職員の優良なる設備の完成せる所謂内容外觀兼ね備はるる点に



平陽實科女學校

於て、福島縣下に於ける私立實科女學校中の隨一と謂ふも、亦溢美ではないのである。今や遡りて之れが創立を討ぬるに、實に校長酒井ヨ子女史が終始一貫せる誠意と、多年奮闘努力せる結晶に外ならないのである、今を距ること二十有餘年前までは、石城郡地方には小學校以外に何等女子教育の機關なく、女子第一必須の裁縫の如きも、俗に針子と唱へ比較的技倆に達し居るものか、教導せる位のものかて裁縫以外には何等婦徳の涵養を顧みないものである、斯くては女子が將來良妻として、又賢母として、一家を整理し、子女を教育する上に於て、洵に鈔からざる遺憾を感じ居たか、酒井女史はこの大なる缺陷を補はんか爲め、遂に一大決心を以て、裁縫技術は勿論婦徳涵養の教育を施す學校を創立せんとしたのは明治三十七年の冬、時將に日露戦争の酣なる國を擧げて奔走最中の秋であつた、創立に關する一切の手續を了して出願し、愈認可になつたのか、明治三十八年三月二十八日である、認可を得ると同時に兼て計畫せし一民家を借り受け、平陽裁縫女學校と命名して開校したのか四月八日である

生徒募集に就ては或は文書に依り、或は有志者を訪問して勧誘せしか、入學者僅かに三名のみであつた女史はこれにて創立に付て一切の費用即ち充用校舎の修繕學用品の調達の爲めには衣類は勿論、頭髮の裝飾具に至るまで、賣却若しくは典物に入れ残れるものごとでは僅か不斷着と外出用の衣類二着のみであつた、此



酒井校長
力盡した學校か、開校勿々とは入學者のみにては、い

かてか失望と落膽の淵に沈まては居るべき、此際一時女史は寡婦の纖手にてはとて學校經營の如き大事業は出来得べきものではなく、寧ろ此のまま閉校せんかと思ひ詰めたのであつたか、又情／＼思ふに學校教育は獨り生徒數の多寡を以て云爲すべきものでなく、要するにまた自己の微意衷心が充分世

間に對して徹底せぬためであるから、尙一層の努力を爲し、仮令一人たりとも實際の効果を擧げ得ることか、出来得るならば、必ず目的達成の日あるへしと自強息まず孜孜倦まず從事したので、同年九月の募集には二十名許りの入學者を得たのである

爾來經營三年生徒數も八十名に達し、漸次校舎の狹隘を感じるに至つたので、明治四十一年平町田町元郵便局跡の空地を借り受け、新築せんと計畫し着手せしか費用の不足を告げたのであつたか、此の時は最早學校の成績も擧り從つて信用も日増に加はりつつある際であつたゆへ、平町は勿論石城、双葉、相馬の三郡に亘り、有志篤志家より應分の援助を得て、落成を見るに至つたのは實に同校が發展の第一歩として慶賀すべきことである

春風秋雨を閱する七星霜、其間大正八年には從來の學科、技藝科の外教員養成科を設けしゆへ、生徒數増加せしを以て更に増築せしか、思ふ様に收容し得ざるを以て、遂に掘堀小路に地を相して新築せしか即ち昨年九月移轉せし新校舎である

達し、その多くは一家の主婦として成績を挙げ、又
學校職員として教職にあるもの、職業婦人として社
會の第一線に乗り出し會社銀行又は商店に勤務せる
ものも多數に上つてゐる、現在收容の生徒數は四百
參拾六名にして、石城郡内は勿論双葉、相馬、田村
石川、東西白河の諸郡、又は遠く茨城縣下よりも入
學せるものあるに至つては學校の優良なることを知
ることか出来るのである、同校の教科目は裁縫を王
として修身、作法、家事等であつたか、時代の推移
と共に普通學の必要を認め、一方又縣立高等女學校
入學難を緩和する爲め、高等女學校程度に準する高
等女學部を新設し、總て新築落成と共に内容の改善
に努力し、從來の職員は專任、囑託を合せて十七名
なりしか、最近に至り東京高等師範の出身にして永
らく東京實踐女學校に教鞭を執りし寺島操氏を招聘

磐陽の人物

(一)

荆城生

時代か人物を産むか、境遇か人物を産むか、由來磐陽の地、濟々たる多士決して有爲の人物尠きにあらす其

人格の敬慕すべきものあり、主張識見洵に傾聴すべきものあるあり、今之を石城郡に就て見んか、官吏より出
てて實業界の長老たるものに先に白井達平翁あり、後に青沼鋒太郎氏あり、現代議士に議會の新人比佐昌平氏
あり元代議士に財界の飛將軍白井博之氏あり、時勢の非を觀て故山に退隱悠々自適せる安島重三郎氏あり、久
しく健康勝れず静養中の高岡唯一郎氏あり、電力を經營せるもの南に植田電氣社長金成通氏あり、北に四倉電
氣社長新妻盛氏あり、何れも孤壘を堅守し大敵を前に模範的の經營は其舉洵に壯とすへし、現縣議に、木村
清治、井上茂作、小野普平、草野順平、大平睦四郎、古川傳一の六氏あり、平陽富豪の双壁として山崎與三
郎、諸橋久太郎の兩氏あり、元縣議に鈴木辰三郎、高木己之吉、鈴木省吾の諸氏あり、財界の新人中野甲
藏、白井一郎の兩氏あり、法曹界の新人酒井喜代正氏、刀圭界の新人青沼淡夫氏何れも將來を期待せらる、宗
教界の奮闘兒に小松學俊師あり、官界の新人水産試験場長飛塚高次氏あり、東都實業界に盛名を馳せる中澤
彦吉、近藤利兵衛兩氏は共に白井博之氏の令弟として逸す可からざるの人物なり、製藥王星一氏は夫れ全國
的人物乎、双葉郡には元代議士に國士愛澤寧堅氏あり、元縣議に渡部興綱、小松幹夫の兩氏あり、現縣議に
山田六郎氏あり、實業界の奮闘兒堀部留造氏あり、人格者としての鈴木大久氏、德望家としての馬場房時氏
雲を呼ぶの龍は雌伏する新妻榮造氏、郡宰として循吏の令名高く郷里に歸臥せる、榎谷治三郎氏あり、財界
の兩雄浪江銀行頭取佐藤慶助氏と新山銀行頭取石田忠宗氏共に温厚篤實の人格者なるに於て好一對と稱すへ
し、刀圭界の天才書伯半谷廣男氏前途春秋に富む將來の造詣期待せらる、相馬郡には二十六歳縣議當選以來
今日に至れる名議長鈴木重郎治氏あり、福島電燈の取締役阿部鶴五郎氏あり、現代議士に佐藤富十郎氏あり
前代議士に松本孫右衛門氏の中央首都の政界に馳驅せるあり、興業銀行副總裁松本忠威氏の東京金融界に羽
振を利かすあり、現縣議林庄太郎、紺野善治の兩氏又人物たるを失はす八十の頽齡を以て矍鑠尙壯者を凌ぎ
學德一世を風靡せる儒者佐藤精明翁の如き國寶と稱すべく洵に景仰すへし、令息相馬農蠶學校長佐藤弘毅氏
の如き最も春秋に富む實業學校長にて終るものにあらす中央學界に雄飛するの機あるへきは期待する所なり

せしか、尙この新學期には專任教師を増聘して大に
萬般の施設上新生面を開拓する由なれば益々發展す
へきことを期待し得る

新築校舎は木造二階建總坪數三百八十六坪工費四萬
餘圓を要し、教室の外作法室、陳列室、寄宿舎及び
食堂の設備一として完成せざるものなく、四百餘坪
の運動場を有し、土地買入費工費合せて實に七萬圓
を投せし由、以て全班を推知し得らる、ことに特記
すべきは多年實用の婦人を養成したる、その薫陶の
功著しくその勞や實に多とすへく、校規を統一し校
風の振肅に努め、成績の見るべきものあるは大正三
年六月福島縣教育會長より、又大正九年九月福島縣
教育會石城郡支會長より表彰せられたるに依りても
如何に女史か意志堅固なる女流教育家たることを知
ることか出来るのである

財界の風雲兒中野甲藏氏

三三

氏は時勢の幸運兒なり、然れども其幸運なるもの決して天降地湧の偶然にはあらざるなり、奮闘努力の結果なり氏は蓋し極めて機敏の人なり、能く人の發見し得さひ窮處を洞見し、間髪を容れざる底に機巧を弄す、是を以て而かも能く風雲に乗して以て風行兩施の幸運に際會するを得たり、氏明治十八年六月を以て石城郡好間村に生る、小學卒業後磐城學會に學ぶ、已にして入山探炭株式會社の一雇員となりしか辭して磐城銀行に就職す、是れ氏が現今の境遇を造りし第一階段たりしなり、生來明晰なる頭腦を以て事に當り機敏に處現す、是を以て將來必ず大成せんこと大に囑望せられしか、氏や此期待に負かず果然今日の地位と名譽と信用を贏ち得たるは、天降地湧の偶然にあらずるを知るへし、偶嚴父桑次郎氏逝去せらるゝや、其後任者として磐城信託株式會社社長に擧げられしを以て磐城銀行を辭し之れが經營の任に膺る、更に大正七年資本金四萬四千圓の代耕銀行を引受資本金を五拾萬圓に増資し、磐越銀行と改稱す

大正九年八拾五萬圓に増資す、時恰も歐州戰亂の餘波財界の變動の爲め、あらゆる事業上に蹉躓を來せるも何等毫も支障を見ず、由來氏は算數の理解力に富み、組織的腦力を有するを以て、銀行家として最も確實に金融機關を能く運用し以て商工業の發達を促進し、今日の發展盛運を見るは一に氏か奮闘努力の實賜と謂はざる可からず、磐越銀行や基礎已に鞏く以後益々盛運を極むるのみなり、而して氏は永く同行の創業者として又守成者として無窮の名譽を傳ふことを得ん、氏磐越銀行頭取たる外平材木株式會社、平運送株式會社、小田炭礦株式會社、好間軌株式會社の取締役、磐城勸業株式會社事務取締役社長、常磐林業株式會社監査役に就任適く處として可ならざるはなく尤も堅實に活手敏腕を發揮す其勢力絶倫眞に驚く可きものあり、實に磐陽財界の巨星たり、大正十年五月平町々會議員に推薦せられ當選大に自治制の爲め盡瘁す氏年齒漸く不惑前途造詣するところ測に測り知る可からざるなり又能く後進の誘

掖に力を效し、友情に篤く部下を遇するに寛容温情を以てす、執務上に就ては親切敏活忍耐を以て信條とし實行す、其營業を爲すの着眼に於ても公益を先

にし利益を後にするを以て、氏の名譽は地方に於て最も光輝を放ちつゝありと云ふ又偉人なるかな

實業界の精力家小野晋平氏

氏は福島縣石城郡小名濱町の人、舊家を以て稱せらる家代々醸造を業とす其創業は實に正徳年間なりと云ふ、醸造に係る芳醇清世界は其名高く好評噴々たり氏明治十八年十月を以て生る、磐城中學退學後磐崎村吉田漢學塾に入り研學す、嚴父賢司氏物故せらるるや、相續以來能く家政を經理し家運益繁昌を極む又東京に支店を設け市場に搬出販賣す、商戰の畫策は世故に老練なると相俟つて時に奇利を博すと云ふ霸氣縱横才氣煥發せる精力絶倫なる氏は適く所として可ならざるはなく、小名濱商事株式會社社長、平製水株式會社、好間川水力電氣株式會社の取締役、磐城海岸軌道株式會社事務取締役、磐城銀行監査役に就職せる外、目下資本金壹拾萬圓を以て山に恵まれたるは限りあり無盡藏の海を利用せざる可からず

と磐城水産工業株式會社を主唱し設立計畫中なるか切に目的を達成せらるるを希望するは氏個人の爲めにあらず、實に國利民福を思へばなり
其他赤十字社有功社員に推薦せらるる等、實に磐陽實業界の重鎮精力家として推稱せらる、又一方町會議員として町治上に盡瘁し消防組頭として町發展に盡力す公共事業の爲めには私財を吝まず義捐し、公益の爲めに盡すこと殆んど其一身を忘るるものの如く、一に皆精神的至誠の發露なりと云ふ、是を以て德望翕然として集まる、一昨年縣會議員選舉には郷黨より推され多數を以て當選し、爾來縣治の爲めに貢獻するところ尠からず、氏新進を以て始めて縣政壇上に立つや其行動悔る可からざるものあり、一種有望の政治家を以て目せらる、若し夫れ氏にし

て石城半郡を統一する事を得は、氏は己に縣會の人にあらず正に衆議員議員たること亦易々たるのみ、將來必ずや一國の選良として國政變遷の任に膺らるることあるべきは今より期待すべきなり、要するに氏の徳望高くして頼信せらるる所以のものは其眞面

實業界の徳望家馬場房時氏

門地を以てすれば其先は双葉郡の名族なり、資産を以てすれば素封家にして數世優に餘資ありと稱す、人格を以てすれば正義廉潔にして一身の利害休戚を顧みず、熱誠を披瀝して地方公共事業に力を效す、富豪を以て人に驕らず、亦貧賤を侮らず、鰥寡孤獨を恤み人の急を救ふ、徳望の一郷に高きものを双葉郡幾世橋村の馬場房時氏なりとす、氏清酒醬油醸造を業とし銘酒樂實は守田實丹翁の命名するところ芳醇の名高し、福島縣酒造組合聯合會評議員として双葉郡酒造組合長として、所得税調査委員として、將た又村會議員として、盡瘁せらるる、其功勳からず、明治四十三年以來幾世橋郵便局長を奉職以來孜々勤

目なるにあり、其誠實にして人に親切なるか爲めなり、其人物の公平なるか爲めなり、意思鞏固にして理義に明かなるか爲めなり、氏年齒漸く不惑、洋々たる春海の如き前途の造諸洵に測る可からざるなり

三四

めて倦まず、居村消防の爲め金參千余圓を投して瓦斯倫唧筒を購入寄附し、大聖寺伽藍の建築には筆頭多額の淨財を寄附し、郷黨皆其恩恵を蒙らざるものなし、常に皇室中心、祖先拜崇、を其信條とし朝夕禮拜を怠らず、代々相馬侯に仕へ御用を勤めし資産家なり、曾祖父周時翁樂山と號し、徳あり學あり、産ある卒に觀るの人格者なり、祖父信時翁を経て父榮時翁の代となるや、時偶明治戊辰の變革に遭遇し兵馬倥傯の裏國事に盡瘁奔走せし爲め家道大に衰ふ流離艱難の間に成長し、頽勢を挽回せんとし奮勵努力するもの多年實に今日の如き繁榮を見るに至りしは實に、立志傳中の人と謂はざる可からず

明治四十一年九月今上陛下未だ東宮殿下にあらせられし時東北地方行啓あらせらるる時に相馬順胤侯奉送迎のため歸省せらる、順胤侯幾世橋村大聖寺にある昌胤侯廟所參拜の序、馬場家を訪はれ、積善家有餘慶の六大字を書して賜はる、現に侯指定の土藏の入口に扁額として掲げてあり、積善の家餘慶あり其家連の益隆昌を極むるもの豈に故なしとせんや、氏の今日の成功は一に氏か忍耐熱誠奮闘に依ると雖ども蓋し名門の貽範因て來る所なくんはあらず、是れ氏か曾祖父樂山翁の事歴を叙せんとする之れかためなり、惟ふに房時氏の性格徳行の樂山翁に酷似せるもの此祖先にして此子孫ありと又以て誇るに足る、樂山翁は如何なる人物なるか、大聖寺に建立せる故錦織晩香の撰に係る碑文を摘録して、敢て評語を試みざるへし

翁少にして至性あり父疾に罹るや、看護侍養成人に異ならず、侯之を聞き白金若干を賞賜す、幼より學を好み、稍や長して業を中村の碩儒碩道先生に受く、家務繁劇にありと雖ども、孜々廢せず晨誦夜講寢食を忘るるに至る、遂に閱覽強記古今に

通知す、遠近來り教を乞ふ者頗る衆し、蓋し隣里學を知る翁より始まる、而して四方遊歴の士其名を聞き門に踵る翁乃ち款接懇留或は詩文を品評し經史を討論し子弟をして其講義を聴かしむ平居専ら救済に務め賑恤する所極めて多し、而して鰥寡孤獨に最も厚きを加ふ然るに未だ嘗て徳色あらざるなり嘗て閭中火災に罹るもの二十五戸、翁金百圓を出し之を賑貸し終に徴償せず、其意固より之を與ふるにあり

村内興仁寺藩侯の香火院たゞ、一日火を失し悉く烏有に歸す、又金壹百圓を獻し以て再造の資となす侯之を賞し麻衣裳を賜ふ

翁嘗て以謂らく本村一百三十余戸、其能く食ある者二分の一に過ぎず、一旦兇荒に遇ふ則ち其れ能く死亡を免れんやと、是に於て私費若干金を捐し米二千三百包を糴し以て村儲いとなし、飢饉に備ふ、壹村之に頼る、其私費を吝ます人の窮厄を救ふ率ね此類なり

家範嚴ならずして蕭儉僕仁を稱し、郷黨其徳に服す、家世々農商を業とし、翁に至て益豊富、然れ

とも其自ら奉する極めて儉素、毎に其財餘を以て書を購ふに數千卷に至る、蓋し唯其膏味を咀嚼するにあらず、之を日用行事に發し將に以て後學に惠せんとす

を風靡し、明治維新以來藩の儒者錦織晚香、西植堂相踵て移住し、何れも私塾を開き、帷を垂れ子弟を薰陶せしため、地方文化の發祥地として今に尙其遺風の存するを見る、偉人の感化洵に欽慕に堪へざるなり

人として爲り温恭退讓篤行の君子なり

由來幾世橋村は舊相馬藩領にして、樂山翁出て一世

宗教界の奮闘家小松學俊師

昔明の藕益大師歌ふて曰く「法林凋謝不能春、黃葉秋風嗟愈臻、圓頂方袍雖偏世、忘身爲法果誰人」と歎念ふに佛教界の護法其人に乏しきや今古同一轍、誰れか亦た浩歎せざるものあらんや、筆者物色して茲に一人を得たり、濟海山如來寺住職小松學俊師是なり、師は實に佛教家中異彩を放てる畏敬すべき名僧にして、現代稀に觀る奮闘家なり、是れ特に評議を試みる所以なり、師明治十三年十二月を以て徳島縣海部郡牟岐浦町に生る、實業家小松俊藏氏の長男なり、幼にして徳島市東照寺に入り得度す、已にして高野山中學林に學ひ業を卒へ、教師を命せられ權少

僧都に補せらる、日清戰役の時土屋第四師團長に屬し、各宗奉國會の爲めに盡瘁す、東照寺本堂庫裡大修繕の舉あるや、淨財を募り師傳を補佐して遂に落成せしめたり、明治三十六年七月徳島市萬福寺にある蜂須賀侯守本尊觀音堂修繕の爲め、是又た淨財募集に盡力し落成を遂げたり、同三十九年高野山普賢院大坂市西區出張所に於て釋秀演師と正法會を組織し布教宣傳に従事す、同四十年十月福島縣石城郡四倉町濟海山如來寺の住職となるや教化の劈頭として慈善夜學校を設け生徒に教授す元來如來寺は久しく無住職にて有りし故荒廢甚しく秋風落莫到底寺院とし

て見る可からざるを慨き、茲に寺門隆興を企畫し、第一着に寺門石段を改築し樹木の植付を爲し、續いて有志者の篤志を仰き寺内に別莊を建て、釋迦像軸物及大般若經六百卷を新調す、同四十一年九月今上天皇陛下未だ東宮殿下にあらせられし時東北地方行啓あらせられし紀念として、各宗佛教同志會を設け、幹事及布教師を囑託せらる、同四十四年寺門隆興の功に依り大覺寺派管長より甲種特遇を受く、大正二年高野山教會四倉支部設置を認可せらる、支部の本尊として宗祖大師尊像を奉迎安置す、去る明治四十年普山當時の素志に基き、愈々本堂建築に着手す、大正七年十二月に起工同十三年五月竣成す、間口七間奥行六間、一間の四方縁、玄關二間四面、屋根は總銅葺にして、是れか總工事費實に金五萬餘圓を要せしか是れ一に昔師が多年夜を日に繼ぎ、風餐露宿の苦を

嘗め、東奔西走又南船北馬、席暖まる遑なく奮闘努力して募り得たる血と汗との結晶なる淨財なりとは人皆驚異せざるものなり嗚呼人力は偉大なりとは師に於て之を見るべく、何如に師に至る處寺門の隆興に盡せる奮闘家たる事を知るべし、到底暖衣飽食無爲にして空過し碌々拱手成を仰く僧侶輩の夢想せざる所なるべし、落慶式は來る二月十三、十四の兩日に、智山派管長代理旭僧正、高野山總本山總務藤村僧正の兩師及各宗寺院住職出席修行する由なれば、定めて地方未曾有の崇嚴盛儀を極むるべし、師常に布教宣傳に付ては、講演に説教に一意専念一身を捧げて努力する其勢多とすべく釋尊の化身なると地方人の崇信篤く景仰せらるゝところ、眞に名僧たるに愧ぢずと謂ふ可し

嗚呼義士松井秀簡

元和園主人

福島縣磐城國石城郡を貫通せる常磐鐵道線に一帯あり、泉と云ふ、叢爾たる農村に過ぎず、予は往年嘗

て此の地を過ぎりし時は、驛頭僅に店鋪を見るのみ、道路寂として行人稀に、戸々藩籬を繞らし、衙門玄

關に通じ、其の趣尋常の農村と異なる所あるを視て幼少の記憶に存せる舊時の侍屋敷を想起し、懷舊の念坐ろに動きて、低回稍久しかりしか、果せる哉、此れ舊泉藩治の在りし地にして、附近一帯元の菊多郡二萬石の山河は、幕府の譜代諸侯本多能登守の所領なりしとは、後にに至りて之を知りたり、爾來漸く此の地の人士と接するに及びて、舊時の流風餘韻今尚ほ其の間に存せるか如き感あり、依りて故きを温ねて、此の頃一士を獲たり

泉藩に義士あり、松井氏秀簡君は即ち其の人なり、通稱は兵馬廉夫と號す、家世々本多侯に仕ふ、父を秀俊と云ひ、母は齊藤氏、君は其の第三子なり、幼にして顯悟、好みて書を読み、書を寫し、嬉戲詩兒に異なり十六歳の時、一詩あり溪居と題す

ト宅渭陽綠柳灣、澤梁無禁足凌艱、朝投芳餌衝烟去、夕獲鮮鱗載月還、人事不關名利絕、塵囂無踏是非閑、常追呂尚垂綸趣、西伯來時只愧顏其語氣已に老成人に似たり、長して磐城平藩の儒者神林復所に就きて道を問ひ、旁ら軍學擊劍操銃を學ぶ年十七、學ひて優なり、仕へて徒目付に擧げられ

教授を兼ね、餘子を以て家を起す、安政年間徒小頭及代官に辯し、累遷して郡奉行となり、班秩並ひ進む

君既に什へて優なり、則ち三春藩の和算家佐久間續及ひ廣島の和算家法道寺通達(號觀山)を師として、算數の淵奥を極む、其の職を奉し、事を處する格勳精詳、特に廉潔を以て名あり、僚友其の才を推し、庄屋組頭何れも欣慕せざる者無く、弟子亦その德に服す、人となり明敏にして謙讓、慈愛以て下を撫し温顔以て人に接す、未だ嘗て詭激の行なし、郡宰に任せられんとせし時、君偶病あり、辭して受けず、聽許せられざるに及び、病の故を以て固辭す、母君激勵して曰く、人孰れか榮達を欲せざるむ、而も巧言令色以て之を求むるに至りては抑も又醜なり、然るに汝今、君公の明鑑に依り、圖らずも此の恩命を蒙る、何の恥か之あらむ、速に命を拜せよ、之を辭するは不忠なりと聲色共に厲し、暫らくして君公使者を以て、優渥なる恩命を賜ひ靜かに病を養ひて全癒を待ち、徐に出仕せしめらる君是に於て感激し、意に意を籲すに至れり、其謙讓此の如し、其の人を

誨ふるに、深く楠公を慕ひ、屢高山正之等の志士と稱し、且當陸の志士西九帶刀二田某等と好を通し常に大義名分を明かにするを以て自ら任したり

明治戊辰、幕府終に大權を奉還し王政復古の鴻業已に緒に就きて、榮の犬は堯に吠へ、獨の犬は天日に吠ゆ、奥羽逆連盟して會津を援け、王師に抗せむとする時、君は泉藩に於て、監察北郷保定等と俱に固く大義に持し、切に名分を論して、大に勤王の議を唱へ、藩論略此に一決したるに五月二十八日、彰義隊の同志人見勝太郎遊撃隊と稱する一隊を率ひ、輪王寺宮を擁し長鯨丸に坐乗して常陸平潟に上陸し、其の一部隊は鈴木安藝守以下十六名隨從し、磐城三藩は其の警衛を命ぜられ泉及び平に一宿しつゝ、會津に赴きたりしか、其の大部隊は仙臺中村等諸藩の兵と俱に留まりて泉に在り頻りに強ふるに王師を拒かむことを以てしたり、爲に藩論復ひ動搖して、佐幕の議に傾く、君獨り其不可を論し、死を以て諫争せしも容れられず、自及せむとすれば、城中、人の隙

斯る間に、六月十六日官軍の軍艦平潟に到る、仙臺

の斥候兵若干之を見て、急に植田に退く、官軍江戸の藩邸に在りたる星野正治浦越豊恭の兩藩士を放ち還し、藩主に對し順逆利害を説きて、歸順を促さしむ、兩土間道を潜行し、同盟軍の斥候を避けつゝ、夜間辛うして泉に到る翌十七日會議あり、藩老等小義に拘り、細節に泥みて遲疑躊躇し、議容易に決せず、君深く之を憂ひ、諄々諫々諫争して已まず、遂に同志若干を得て、殆んど藩論を回すに至りしか、事已に機に遲れて奈何とす可からず、仙臺中村平三藩の兵は同日植田を發し、關田より海に沿へ勿來關趾の北方に進みて、此處に官軍を逆撃せんとせしも、關趾附近險要の地は已に官軍に奪はれ、同盟軍は退きて、關田原に陣し、此の月奥羽東海岸最初の

一戦は此の地に起りしか、同盟軍は暫時にして敗走し、泉藩主を強要し北行し、藩士の大半亦之に隨ひて去り、彰義隊の藩兵は廳に迫りて軍資を強要す藩議已むを得ずして之に應じ、領内の民より其の資を徵募せむとす

此の時、君斷して之に從はず論争して曰く、普天の下王土に非ざるは無く、率土の濱王臣に非ざるは

無し、今の王民に課するに、王師に抗する資を以てせむとす、我苟くも郡宰の職に在り、豈に是の無道を敢てするに忍びむや、王民を慮し、天意に悖らは覆敗必す至らむ、と意に藩論を繕して要求を斥くることを待たり、語に曰く人爲さることあり、而して後に、以て爲ることあるへし、と世の爲さること無き者、何ぞ能く爲るよとあらむや

官軍益進みて、城西の要害新田山に近つき、社稷の存亡且夕に迫る、民皆負擔して起つ、二十二日城中衆議始めて決し、終に出て、王師に抗せむとするに、至れり、噫君胸中の成果して如何、請ふ之を付度せむ

齋に仕へむか、楚に事へむか、是の謀は唯一あり、斯の池を鑿り、斯の城を築き、以て來る者を待たむのみ、然れども、天に二日なく、地に二王なし、王師若し來り臨まば、饗食壺漿して之を迎へむ、彼の盟約の如きは抑も又尾生の信に過ぎざるなり、然るに我が言聽かれず、我が議容れられず、我が邦君をして大義名分を紊亂せしめ、汚名を後世に遺さしめむとす、哀哉、悠々たる蒼天、彼れ何人ぞ、我が進退茲に

谷まる、但し、若し我をして獨り一身を潔くせんとするに止まりしめは、奮然起ちて王師に投し、大義に據りて親をも滅せむこと必ずしも不可なりとせず、然れども窃に顧みて、我が君臣累世の恩義を念へば、我猶心に慚怍たるもの無きを得むや、若かし、一死以て我が志を明かにせむには吁嗟逝かむ、我豈に生を淪まむや、皇天后土我が志を知らむと此の日節か

に出て城外鹿島神社に詣り階前に端座し、從容として自裁せり享年四十二、郊外玉露村字道上に葬る配吉田氏、二男あり長は清水、次は秀英

君一たび死を決して、其所以を言はす、既に逝きて、一片の遺書無し、然れども、翌二十三日新田山の戦ひより二十九日落城に至るまで、歸順者相續きたるは、君の一死與りて功なしとせず、官軍深く君の死を悼みて其壙域を守らしめ、藩廳は祭祀の典をひ、縣は官を置き墳を監守せしめ且其英靈は長へに靖國神社に配祭せられ本年攝政殿下の慶典に當りて從五位を追贈せらる、君の大節此れに至りて千載青史に耀き、萬古に亘りて、皇運を扶翼し奉らむ君亦以て冥すへし、孔子夷齊を稱して曰く、齊の景公馬

千駟あり、死する日民徳として稱するもの無し、伯夷叔齊は首陽の下に飢たり、民今に到るまで之を稱す、と君ば蓋し伯夷叔齊の流か、感嘆の餘り、其大略を記すと云爾

磐城平

元和園主人植竹源太郎謹識

書松井廉夫傳後

福島縣 石城郡 釀造業と釀造家

清酒は我國固有の嗜好飲料にして、醬油は又其の必須の調味料たり、故に其品質の良否は國民の衛生保健に至大の關係ある贅言を要せざる所なり
由來東北地方は酒造地としての條件具備せり、第一酒造の原料たる米の産額に於て、亦氣候寒暖の程度と、長短に於て、將た之れか勞働能力に於て、其附屬器材の豊富なる点に於て、更に地方人の酒造業に對する趣味と、技術の卓越せる点に於て、全國に於ても近畿、中國、静岡地方に亞くへき第三位以下

松井君秀簡、慷慨奇傑之士、戊辰之變、忠諫正義不容、一死報國、何其烈也、此篇鋪叙暢達、發揮大節其人宛然、躍出紙上、豫與其嗣清公子相識、今及讀此傳、感慨特深矣

相馬

雙峰

佐藤精明拜稿

に落ちる優秀の地方なり、酒の造り込は人の知る如く、北海道の如く寒きに過ぎず、九州地方の如く暖きに偏せざる土地に於て爲すにあらざれば、相當の成績を収むる事はさるなり、故に北海道、九州地方は酒造地として適當の地にあらすと公定され居る次第なり、然るに東北地方は此の造り込に對する氣候寒きに失せず、亦其期間短きに陥らず、最好適地とせらるのみならず、生産する所の米は其實と量とに於て全國に於ても、總ての他地方産を凌ぐ程の

好成績を示せり
福島縣石城郡内の酒造家は合計五十四箇所にして、造石數貳萬七千四百六拾石に達す、一郡内に於て此く多數の醸造場を有するは、縣下は勿論東北奥羽地方に於ても、石城郡のみならず、東北の灘郷の名稱に負かすと謂ふ可し、左に醸造家の住所氏名及酒銘を列記せん

花の友	平町	山崎元三郎
由良の助	全	永山和治
磐陽	全	叶田錦治
平玉	全	馬目玉彌
磐陽男山	飯野村	永山繁木
愛國	好間村	町田酒造合資會社
正駒正宗	永戸村	會田正一
近盛	内郷村	馬目太吉
福美	全	四家又一
巴正宗	上遠野村	櫛田吉太
松正宗	渡邊村	高木巳之吉
清福	植田町	鷺清吉
稻妻	全	古川德三郎

千代錦	錦村	正木治郎兵衛
白川	川部村	芳賀嘉右衛門
四時川	全	小野魯平
改泉	全	櫛田雄三
勿の	窪田村	赤津
花井の	全	大平兵助
御代の鶴	鹿島村	佐原久義
立花	小名濱町	立花典次郎
清世	全	小野晋平
養老	全	草野良太郎
磐崎正宗	全	小野四郎
長生	全	柳内芳之助
淀の月	全	齋藤定次郎
長盛	全	吉原彌平
白雪	江名町	近藤美喜作
伊勢盛	全	大平彌喜
盛鯛	磐崎村	御代武兵衛
御代一番	全	志賀久作
雛鶴	高久村	矢吹清貞
清盛	全	本馬佐源次
福鶴	全	

澤の井	全	鈴木兵十郎
稻穂正宗	全	鈴木平司
東海	全	箱崎淺吉
三ツ星正宗	全	大友金次郎
谷盛	全	大谷喜作
小錦	全	鈴木喜太郎
豐浪	豐間村	阿部源兵衛
茗荷正宗	全	馬目仙十郎
三國一	草野村	渡邊イチ
玉泉	大野村	石井市五郎
日の出	大浦村	木村榮次郎
松の友	草野村	豐田吉松
勿來正宗	平窪村	松本徳一
鶴仙	全	松本多仁
北斗正宗	下小川村	吉田至誠
谷の井	赤井村	木田照保
三國一	全	渡邊イチ
永盛	川前村	永山龜太郎
旭川	三坂村	田子三太郎
三坂正宗	全	熊谷長一

玉川 玉川村 長瀬半五郎
斯く斯業者の多數なるは、勿論水質の良好なること其一因にして、又憑據すべき文獻の微すべきものなく判然せざるも、舊藩時代當時の税制其他に於て他と比較し便宜なる何物かありしか爲めにあらずやと思はるるなり、近時名聲漸く高くと共に又産額の増加を見、一般的に發達して色澤、香味極めて勝れ堅實溫雅眞に天下の銘釀たるを失はすして、宛然天下を風靡するの概あり、所謂優秀なる芳醇の名聲克く天の美祿を代表し、商品として縣外に輸出するには最も有望なる地位を有するものなりと雖も、東京地方販賣の灘ものに相對抗して、將來都會地に於て輸贏を決せんとせば、益其實を改むると同時に其量を増加するの方針を取らざる可からず、是れ決して難事にあらず、斯業者諸氏が一層研鑽、攻究斯業の爲めに盡瘁する如何にあるのみ、是れ即ち自他の福利を増進する所以にして、今より期待に堪へざるなり
醬油釀造家は合計八十四箇所にして造石數壹萬八百參拾石に達せり、曾ては其産額微々として振はす、

醸造技術も亦甚た幼稚にして、兎角舊套の域を脱せざるものとして、廣く世人の耳目を惹くに到らざるの憾ありしか、年來當路者の誘掖と斯業者の奮勵とにより近時驚く可き長足の進歩を呈し、優良品頗る多く、範を斯界に垂れ其品質も年と共に面目を革め大體に於て漸く品質の統一に接近せんとするの傾向を示し一般的に改善進歩の跡歴然たるを認むるは勿論、色澤鮮麗、香氣芳烈、醃味亦豊艶にして、所謂五味の調和其宜しきを得、之を先進地の優良品に比するも、敢て一籌を譲らざるの趣あるもの、比較的多數なるは頗る世人の意を強ふする所にして、是れ明かに原料の撰擇處理より、諸般の操作適當なるか

爲めなり、近來一般に嗜好の向上を促し、其結果上物の賣行き年と共に増進するは、數の免れざる所なれば注意を拂はざる可からず
東北の地たる原料の産額豊富にして、其質又醬油の醸造に適するもの多し、諸味の醃酵上稍天恵に薄きものに於ては遺憾ながら、諸味の醃酵上稍天恵に薄きものあるを以て、此間に處して克く醃期の彌久を節し而も品質の優良を期せんとするには、特に製麴の技術に長し、鹽度濃厚に失せず、糴入を完全に行ひ、又は機械力を應用する等一層の研鑽努力を加へざる可からざるを以て、益協心戮力一層斯業の振興に奮勵を惜まざらんことを希望するものなり

營利事業と社會奉仕との一致併行を 根本精神とせる四倉電氣株式會社

由來會社事業は、已に營利會社たる以上は、其會社株主の利益を第一に置くべきことは、當然のようであるか、電氣會社の如きは全然たる公共事業でない

としても、保護政策の恩恵に依る獨占事業の性質上公共の觀念即ち多數電力需用者の満足を図る事も閑却してはならぬ、この点を能く理解して經營せる唯

一の電氣會社を物色し得て、大に人意を強ふする次第である

唯一の電氣會社は、福島縣石城郡四倉町の有力家新妻盛氏を社長とせる四倉電氣株式會社である、實に同社は親切第一を主義とし、營利事業と社會奉仕との一致併行を旗幟とし組織的經營を其事業の根本精神とする、特記すべき最良の電氣會社なり

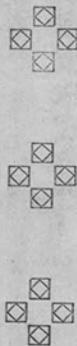
以上の主義旗幟精神によりて、此の財界不況の折にも拘らず、活潑と發展の實例を社會に示してゐるのは實に壯快に堪へない

同社は資本金五萬圓を以て、大正三年三月創立せるものなるか、現在供給區域は石城郡四倉町、大浦大野の二村、双葉郡久之濱町、木戸、廣野、大久、瀧田の四村なるか、漸次擴張する由、燭光は十燭光換算壹萬參千貳百貳拾燈、電力約貳百馬力にして、積立金壹萬七千九百圓、現在資産合計金拾七萬六千貳百拾七圓の巨額に達し居る由、資本金五萬圓に對照して如何に同社が堅實にして最良の會社たることを知るに足る、へし、今重役諸氏の顔振れを見るに、取締役社長新妻盛、同橋本萬右衛門、同根本祐太郎、

同西山龜太郎、同太田三郎、同湯川廣 監査役菅原亥之助、同今泉得三、同吉野忠治の諸氏にして何れも郡山市を中心とせる磐城地方の財人である

同社の徴收せる電燈料は地方籍に見るの低廉にして十燭光の料金僅に六拾錢である、今之を郡山電氣供給の平均の如く七拾錢とし拾錢値上すれば、同社は年に六千圓の増收を得る譯なるか、以上の主義精神より決して値上せざるどころに同社の價值があるのである

又重役社員職工皆一家族の如く、打て堅實なる一團となし、共済組合、退職給與、義務貯金等の設ありて、常に冗員を置かざる様注意を拂ひ、成るだけ少數の社員職工を使用して優遇する故に却つて能率か舉かる、未だ會で同盟罷工とか怠業等の爭議起りし事なく、能く圓滿に人格者新妻社長の下に協力一致して、社業遂行上遺憾なき様努力し居らるれば、將來の發展期待すべしと稱せらる



公債の民衆化と國民的大節約を

標榜せる斯界の權威日本國債株式會社

我邦財政の現状如何、有識者具眼者の齎しく憂慮して措かざるころ亦宜なりである、大正五年に我帝國が有せる國債は貳拾四億六千八百萬圓なりしか、八年後の大正十三年に至りては、實に倍額の五十億五千萬圓の巨額に達す、是れ皆我か六十萬國民同胞の双肩に掛かる國債なりとは、我國民たるもの唯に恐惶して已むべきものでない大に發奮勤儉力行せざるべからざるの秋である、又昨十三年我邦の輸入超過は前代未聞、實に七億圓之れに反し彼の排日專横なる米國は輸出超過二十八億圓の巨大を示せりと、噫内慮外患交臻る、是れ當に國難來る、借開す此の秋同胞の覺悟や如何、曰く他なし宜しく勤儉力行し貯蓄し、以て國債を負担して自給自足を圖るの決心か第一肝要である、之れが羅針盤として日本國債株式會社を推奨せんとするの微意又ここにあるなり、東京市京橋區元數寄屋町に本社を有する同社は、大

正元年の創立にして、資本金參百萬圓を擁する、斯界唯一の權威たり、公債の割賦販賣、資金の簡易融通を目的とせる利殖と貯蓄の最良機關である、公債の民衆化である、國民的節約の指導者である、現在の取引總契約額は七千參百萬圓にして、年収入額二百五十拾萬圓の巨額に達せる大會社である、社長竹村欽次郎氏は元仙臺稅務監督局長を奉職せし人格者、取締役林千八氏は熊本銀行頭取、取締役内田民部同前田一郎、同一圓五郎、同小野澤軌一、同友成四郎、監査役八田精一、同島田庄吉の諸氏、何れも財人、人格者揃へなれば、現在に於ける公債取引會社中最も堅實にして信用ある、會社なること推して知るべし

思ふに事業界の沈靜なる、不況に頻せる今日に於て確實ある資金の運用方法としては、銀行若しくは郵便局に預金するか、政府發行の公債を買入れて、資

金運用の途を講ずるか、尤も捷徑安全にして肝要である、然れども公債の買入は利廻り良く財産として子孫に譲渡するには、最も便利であるか公債買入に就ては安心して取引し得る、取引會社を撰定することか第一である、然れば確固たる基礎を有する業態の下に堅實なる營業を爲す同社に頼らるることを勸説せんとするものである、同社は東京本社の外支店を大阪市に設け全國樞要の地に支部、出張所、代理店を設置しあれば、我邦現下の財政始末を憂ひ資産の充實を計らんとするものは、宜しく奮つて應分の取引加入せられんことを切望して已まざる所以のものば、一に國民民福に資せんことを思ふ所以である、水戸總監督部は大正十年十月の開設にし、て神善久氏部長として來任し今日の盛況と發展を見るに至る

金成通氏座右銘

植田水力電氣株式會社社長金成通氏は人格の士として會て、縣政壇上に立ち、縣治に貢獻せしことある、磐陽實業界の先輩重鎮である、本誌創刊號に於て、之れが評語を試みんとせしか、資料足らざるの感あるに依り後廻しとなし、茲に同氏か自憲として、左の如き座右銘を作り、關係せる植田水電、磐東銀行、植田物産、

由來水戸市は從來是等金融業會社を設置するものありしか、何れも營業振はす不成功に終るもの比々皆然りであるか、獨り日本國債株式會社のみは、僅かに短日月の間に契約額參百萬圓を算するに至りしは同社の堅實にして信用ある爲めなることは勿論であるとは云ひ、神部長か德望、手腕、力量與つて大に功あると謂ふも亦溢美ではないのである、平出張所主任小林庫二氏亦新進氣鋭の奮闘兒である、水戸市同様の状態にある、磐陽の難天地を開拓して舊聞克く多大の成績を獲得し、同社の爲め氣焰を吐く萬丈、人皆驚異せざるものなし、切に自愛を祈るは、獨り同社の爲めのみでなく實に國家民衆の爲めを思ひはなりである

菊田電化等の従業員に印刷配附せし由なるか、頗る吾人の意を得たるものにして、拳々服膺せば世人を益する多大なるべく、加之同氏の人格識見を偲ふに足ると思ひ、掲載したのは決して記者の老婆でないのてある如き事なき様注意すへし

座右銘

- 一、努力なくして成功なし
 - 一、協力せざれば能率増進せず
 - 一、内外を通して平和なれ
 - 一、業務に熱心なれば趣味生ず
 - 一、仕事に趣味を以てせば自ら愉快なり
 - 一、不平は同情を失ふ
 - 一、自己の責任を重し他人の人格を敬へ
 - 一、自發的觀念を忘るへからず
 - 一、時間は正確に守れ
 - 一、凡て物は愛護せよ
 - 一、消費物は節約せよ
 - 一、今日の事務を明日に繰越す勿れ
 - 一、明日の計は今日樹てよ
 - 一、公私の混交を避けよ
 - 一、不愛憎なる態度にて返辭をなす勿れ
 - 一、たらけた風を御客や通行者に少しでも見らる
-
- 一、依頼の用務を帯ひて來た人殊に婦人の客か出惡へ様に仕向くへからず
 - 一、來客に對し少しにても不熱心や冷淡の風を示すへからず
 - 一、千圓の客も十圓の客も凡て區別すへからず
 - 一、長尻の客に對しても決して始めの熱心を失ふへからず
 - 一、客ある時にても仲間同志相寄りて談話せぬ様注意すへし
 - 一、客を長時間待たすへからず
 - 一、來客の爲に身體や手足を動かすこと怠るへからず
 - 一、客の話は凡で眞面目に之を聞け苟くも腰を折るへからず
 - 一、辭儀は先づすへし後れたるときは恥と知れ
 - 一、先輩を敬へ後進に平等たれ

(をばり)

左の諸氏は本誌發行の舉を贊助せられ、後援を辱ふせらる永久の記念として茲に芳名を録し、深く厚意を感謝す

曹洞宗管長	新井石禪	内國通運株式會社水戸支店長	清水定次郎
法學博士	河田嗣郎	茨城縣土浦中學校長	白井弘
東京帝國大學教授	田中茂穂	古河町長	清水元吉
水戸高等學校長	渡邊又次郎	茨城縣立石岡農學校長	阪部熊吉
常磐病院專務取締役	中崎俊秀	茨城縣立眞壁農學校長	今泉勇雄
水戸市長	鈴木文次郎	筑波町長	齊藤庄平
水戸保線事務所長	沖塩政次	筑波町醬油醸造家	飯村團次郎
茨城縣立農事試驗場長	高橋長八	筑波鐵道株式會社專務取締役	小林恒一郎
茨城縣立第一蠶業試驗場長	大和田亮吉	株式會社常陸北條家畜市場	佐原求馬
茨城電力株式會社取締役	小林德次郎	稻敷郡木原郵便局長	葉梨長三郎
水戸市尋常高等小學校長	堀健吾	稻敷郡江戸崎町醫師	市川虎之助
水戸市上市尋常小學校長	今井信正	同郡同町醫師	山崎義治
水戸市上市第二尋常小學校長	新井正材	同郡江戸崎郵便局長	坂本貞治
水戸市下市尋常小學校長	川上春次郎	同郡江戸崎尋常高等小學校長	山崎義造
土浦町長	笹部重道	同郡江崎實科高等女學校長	中島徹
五十銀行取締役	岡本儀兵衛	茨城縣龍ヶ崎實科高等女學校長	佐藤範一
土浦郵便局長	小川造酒	龍崎鐵道株式會社社長	田中秀太郎

稻敷郡龍ヶ崎町龍泉寺住職 秋田 晃 俊
 龍崎製糸所主 金剛寺 敬助
 新治郡高濱郵便局長 殿塚 竹太郎
 新治郡田余尋常高等小學校長 伊能 林兵衛
 東茨城郡小川町長 中村 純一郎
 同郡小川郵便局長 宮本 庄次郎
 行方郡玉造町正十銀行監查役 中田 丑松
 行方郡玉造町長 瀧崎 一郎
 同郡玉造郵便局長 小川 直人
 行方郡潮來女子技藝學校長 塚本 正之介
 同郡潮來町縣會議員 藤岡 鐵一郎
 同郡潮來郵便局長 布川 誠太郎
 同郡潮來町會議員 飛塚 高次
 福島縣立水產試驗場長 松本 金次郎
 石城郡平窪村醸造業松吉屋本店 上遠野 庄九郎
 同郡平窪尋常高等小學校長 長 壽男
 同郡神谷村長 遠藤 心光
 同郡平町九品寺住職 菅波 忠治
 同郡內郷村長 新妻 盛
 同郡四倉電氣株式會社社長

福島縣相馬農蠶學校長 佐藤 弘毅
 相馬郡原町長 伏見 勇七
 福島縣會議員 鈴木 重郎
 衆議院議員 比佐 昌平
 石城郡江名町眞福寺住職 永崎 亮
 同郡內郷村眞光院住職 松村 智清
 同郡王川村遍照院住職 永崎 亮
 同郡上遠野村圓通寺住職 相川 亮雅
 同郡同村郵便局長 松本 幸太郎
 同郡同村醫師 鈴木 省吾
 同郡同村助役 赤坂 毅一
 同郡同村役 吉田 房吉
 元衆議院議員 安島 重三郎
 石城郡大野尋常高等小學校長 草野 政松
 同郡川部村長 兒玉 萬平
 同郡田人村外三村組合村長 小宅 幸三
 同郡元田人村外三村組合村長 齊藤 勝明
 同郡磐崎村法海寺住職 楠 龍榮
 同郡大野村金光寺住職 平林 義鑑
 同郡大浦村長隆寺住職 吉田 純祐

東京市京橋區元數寄屋町三百三番地

日本國債株式會社

電話銀座(二七〇〇番 二四七四番)

水戸市上市泉町

水戸支部

支部長 神 善 久

福島縣平町南町三三

日本國債株式會社平出張所

主任 小林 庫二

福島縣石城郡四倉町

四倉電氣株式會社

電話 六番

福島縣石城郡植田町

植田水力電氣株式會社

電話三四番

茨城縣新治郡土浦町

蓬萊無盡株式會社

新治郡石岡町

石岡電氣株式會社

電話百二十三番

新治郡石岡町

鹿島參宮鐵道株式會社

西茨城郡西山内村稻田

同業組合事務所

稻田
花崗石

水戸市下市本四丁目

森銀行

水戸市下市水門町

井熊製菓株式會社營業部

電話七〇〇番

水戸市上市西町

山本齒科醫院

電話八二七番

福島縣浪江町

浪江銀行

電話三番

頭取 佐藤慶助

福島縣原町銀行組合

原町銀行

平銀行原町支店

東京信用銀行原町支店

七十七銀行原町派出所

第七十七銀行原町派出所

福島商業銀行原町支店

磐城平町貳丁目

坂田藤助

電話一二八番

和洋銅鐵
度量衡器

福島縣平町舊城跡十二

內兒科
小兒科
皮膚科
花柳病科

青沼醫院

醫學士 青沼淡夫

電話四〇三番

入院應需

磐城植田町

鐵道用枕木商

西岡政男

電話植田二番

鹽屋本店

最上含醬油
釀造元
山崎與三郎

福島縣平町
電話二七番

磐城四倉新町二十六番地

醬油味噌
釀造
鱗屋合名會社

磐城國石城郡平窪村

銘酒 鶴仙釀造元
松吉屋本店

水戸市上市泉町

株式會社 茨城貯蓄銀行

水戸市上市柵町

水濱電車株式會社

茨城縣新治郡土浦町

土浦三津輪銀行

茨城縣新治郡土浦町

株式會社 土浦農商銀行
電話二番一六四番

帝國電燈株式會社

土浦營業所

茨城縣土浦町

新治病院
電話一七九番

私立大日本牧野沃度研究所附屬

濟生病院

水戸市上市鐵砲町

株式會社 栃木伊藤銀行

古河支店

栃木縣下都賀郡野木村

木縣是製糸株式會社
電話古河五一番

栃木縣下都賀郡野木村

下野株式會社

製造品
各種赤煉瓦
各種耐火煉瓦
耐火モタル
赤色屋根瓦
普通屋根瓦
磐城セメント特約販賣

福島縣石城郡四倉町

磐城セメント株式會社工業所

電話特長十三番

水戸市上市裡五軒町

常磐無盡株式會社

電話四二五番

茨城無盡株式會社

水戸市上市元白銀町

電話 水戸四六九番

振替東京六七三五一

石城郡銀行組合

株式會社

磐城銀行
磐城實業銀行
磐城越前銀行
磐城東銀行
四倉銀行
七十七銀行平支店
福島農工銀行平支店
百七銀行平支店
磯原銀行植田出張所

茨城電力株式會社

水戸市北三ノ丸

水戸市赤倉

日本赤十字社

茨城支部病院

水戸市上市馬口勢町二

大國内科醫院

電話九二九番(呼)

水戸市信願寺町

水戸二業組合

電話 八四番
一五〇番
六六六番

筑波郡筑波町

筑波山病院

筑波山神社々事務所

社司 藤 咲 英 次 郎

福島縣平町

私立 藤田裁縫女學校

電話三二八番

茨城縣北條町

波電氣株式會社

電話(北條)十三番

茨城縣土浦町

常南電氣鐵道株式會社

稻敷郡木原村

楯縫神社々事務所

社縣 茨城縣龍ヶ崎下町

大久保醫院

電話一〇八番

帝國電燈株式會社

龍ヶ崎營業所

茨城縣龍ヶ崎町

北浦電氣株式會社

電話四二番

茨城縣江戸崎町

最上醬油 釀造元 增善醬油合名會社

水戸市上市谷中

支店 會田醬油店

茨城縣龍ヶ崎町

有限責任 龍ヶ崎信用組合

茨城縣新治郡高濱町

白菊 釀造 本家 廣瀬慶之助

電話二七番

振替東京三五〇七番

茨城縣行方郡

潮來十五日醫會

茨城縣行方郡潮來町辻

愛友 釀造元 兼 平 義 文

電話(潮來)二番

茨城縣行方郡津知村

內科 眼科 兼 平 醫院

接骨科

兼 平 隆 光

茨城縣潮來町

銘酒文華 釀造元 遠峰良之助

電話(潮來)十四番

茨城縣銚田町

銚田自動車株式會社

電話二〇番

茨城縣銚田町

銚田十日醫會

常州銚田町

木城 晟

醫師

常州銚田町

和出醬油釀造店

水戸市下市本三丁目

井傳 醬油店

電話一四六番

東北公論定價表

每月一回 二十五日發行

壹部 金參拾錢

【郵稅共】

壹年 金參圓六拾錢

特別廣告 壹頁 金貳拾圓

大正十四年一月二十二日印刷

水戸市下市三軒町二十五番地

發行所 鈴木 徹四郎

編輯印刷人 鈴木 徹四郎

印刷所 伊藤 印刷所

水戸市上田見小路六百十二番地

水戸市下市三軒町二十五番地

發行所 東北公論社

水戸市上田見小路七百九番地

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

東北文化協會內

東京市芝區白金三光町二七番地

資本金壹千萬圓【拂込済】

本店東京市日本橋區檜物町

川崎銀行水戸支店

電話一五番、六三番

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

電話石岡一〇番

資本金參百萬圓【拂込済】

本店東京市日本橋區檜物町

川崎貯蓄銀行支店

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

電話一七番

川崎倉庫

電話一七番

水戸市棚町

合資會社

合資會社

合資會社

合資會社

合資會社

合資會社

合資會社

合資會社

合資會社

合資會社

合資會社

合資會社

合資會社

合資會社

水戸市支店

下市支店

馬口支店

北條支店

上郷支店

小川支店

鹿島支店

石岡支店

太田支店

安土支店

磯崎支店

磯崎支店

磯崎支店

資本金 七百萬圓

預備金 八百萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

株式 壹千八百五十萬圓

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

取締役

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

井 色

MOROHASHI'S
LIBRARY
IWAKI TAIRA

24 NOV 1927

小本三台ち院

常磐病院

水戸市上市黒羽根町二九六
電話三〇、八四〇、八七〇、九三八

内科顧問	醫學博士	八田善之進	外科部長	醫學士	小泉富衛
順産人科	醫學博士	川添正道	新醫學士	石川正男	
外科部長	醫學博士	井上重喜	醫學士	阿久津宏一	
内科部長	醫學士	山田靜榮	醫學士	小林四五右衛門	
皮膚科部長	醫學士	萩原省三	醫學士	蘇原近三郎	
小兒科部長	醫學士	滑川舜次郎	醫學士	山崎義忠	
產婦人科部長	醫學士	久須美震一	醫學士	小堀信一	
耳鼻咽喉科部長	醫學士	欠員	藥局長	菅屋孝	
			藥劑師		

大正十四年一月二十二日印刷
大正十四年一月二十五日發行